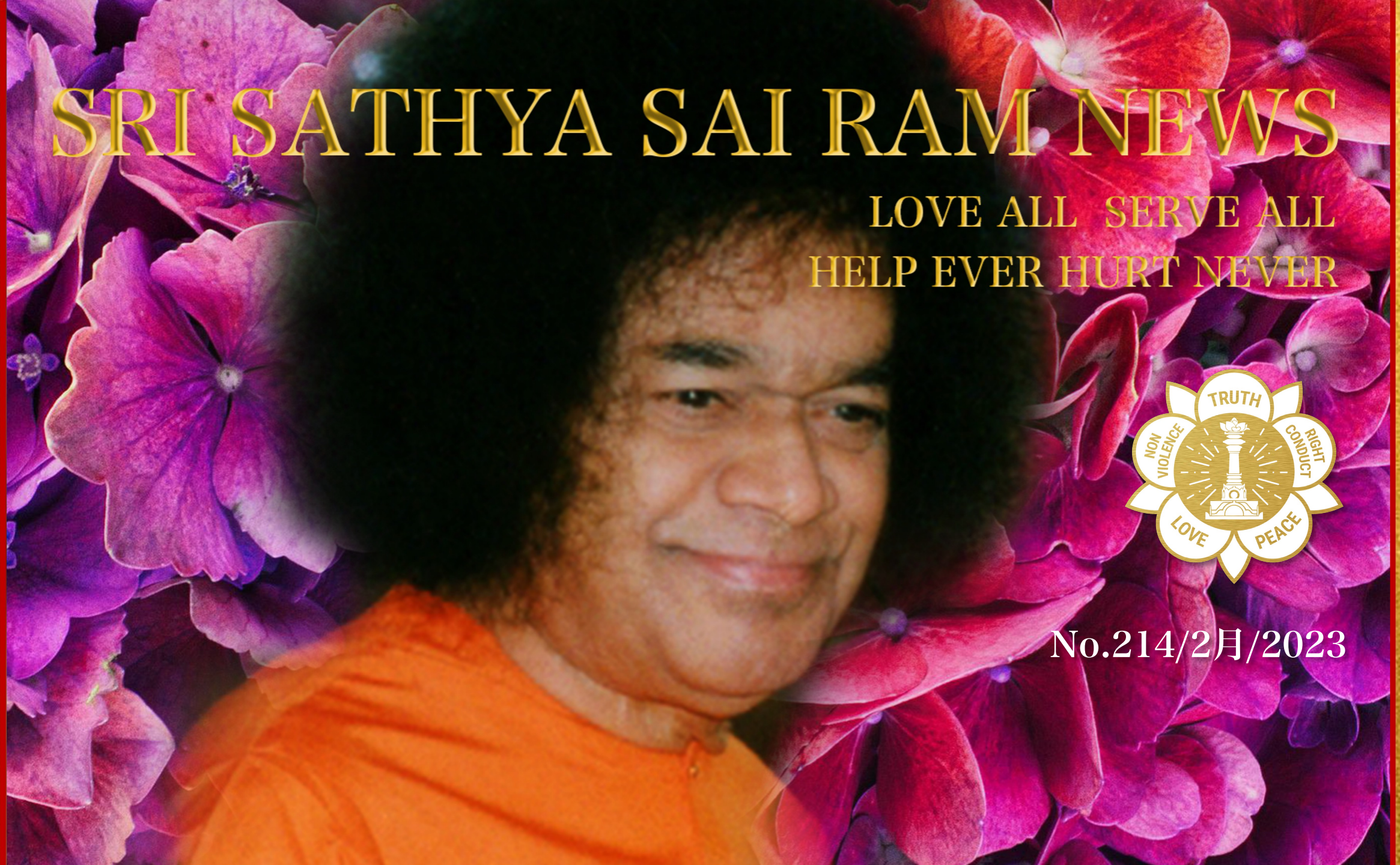
SRI SATHYA SAI RAM NEWS

LOVE ALL SERVE ALL
HELP EVER HURT NEVER



No.214/2月/2023

CONTENTS

◉ サイの御教え

「真我の鞘」

「神聖な気持ちを持って人生を聖化しなさい」

◉ Sri Sathya Sai Baba 様ご生誕100周年記念ヴィジョン

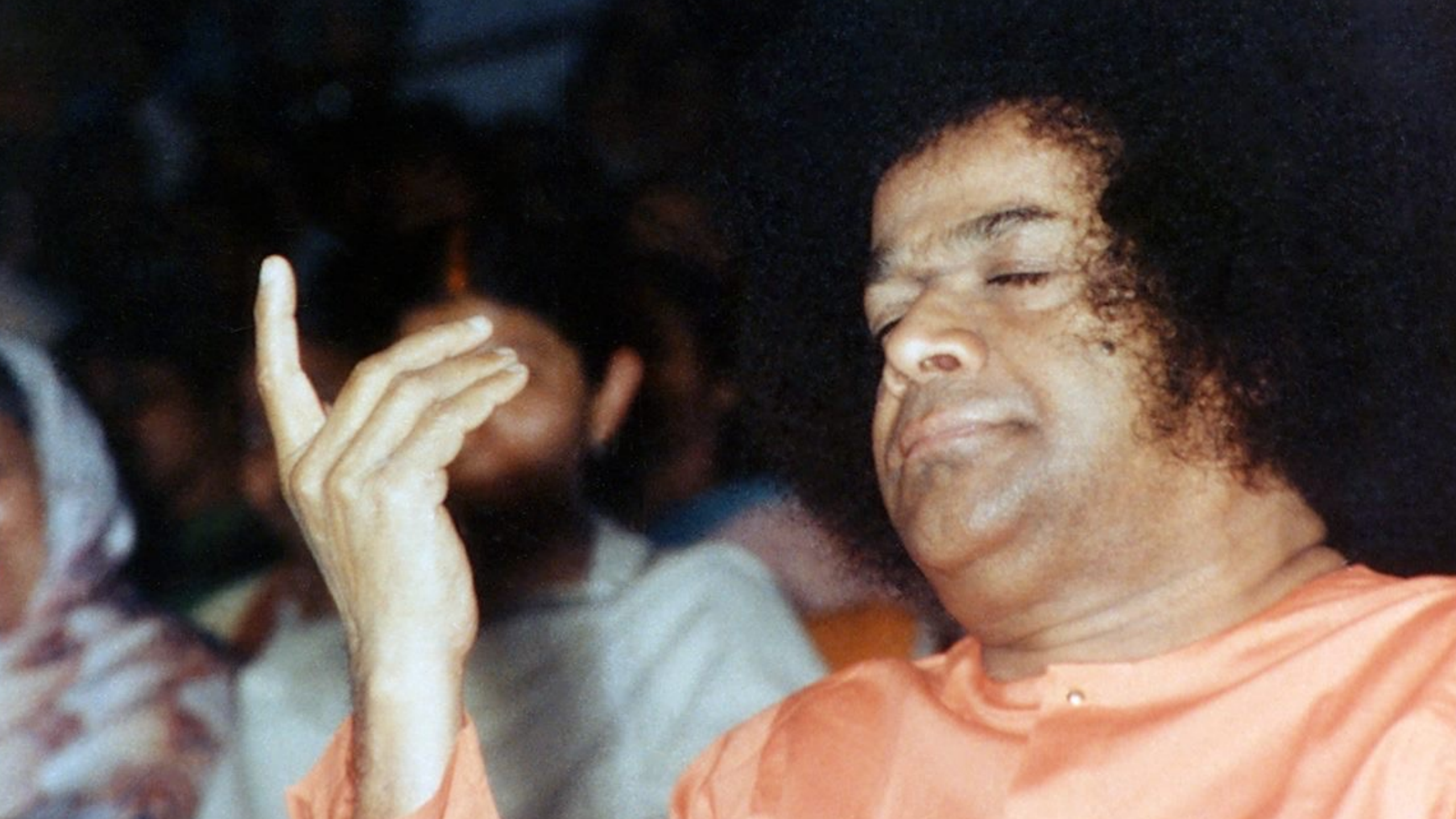
「第二の矢を放つな」

◉ サッティヤム・シヴァム・スンダラム

◉ サイと共に

◉ ワカ チンナ カタ

◉ 活動報告：スタディー サークル



サイの御教え

真我の鞘

2000年
マハーシヴァラートリの
ババの御講話①

愛の化身たちよ! 同じアートマ〔真我〕がすべての人に内在しているという真理を認識した人は、世俗を捨てた修行者であれ、家族生活を営む人であれ、あるいは、行為の道をたどる人であっても、そうでなくても、神との一体感を体験し、神の至福を味わっています。アートマの原理は、ただ単にヴェーダや聖典を学んだり、講話を聞いたりするだけでは理解できません。巨大な樹木が小さな種子から生まれるように、全宇宙の起源はアートマの原理の中にあるのです。

愛の化身たちよ! まことに皆さんは、歓喜と幸福の化身なのです。歓喜と幸福は皆さん自身の中にあるというのに、それらを外の世界に探し求めるのは全くの無知と言えるのではないでしょうか？ 真の霊的変容は、自分自身の本当の性質を理解することにあります。

私たちの教育機関の現副学長と前副学長たちが（先のスピーチの中で）、真我の5つの鞘（パンチャ・コーシャ）の概念を詳しく説明してほしいと私に懇願しました。純粋なアートマは5つの鞘（さや）に包まれていて、それぞれの鞘と結び付くことによって、アートマはその鞘の特性を得ます。肉体は食物の鞘（アンナマヤ・コーシャ）と呼ばれます。目が覚めている状態の粗大体〔肉体〕と結び付いているアートマは、グニャーネーンドリヤ（知覚器官

／グニャーナ・インドリヤ）とカルメーンドリヤ（行動器官／カルマ・インドリヤ）を授けられていることから、「ヴィシュワ」〔全世界／すべて〕と呼ばれます。粗大体はさまざまな外的活動に関わっているので、「ヴィヤヴァハリカ」とも呼ばれます。このように、ヴェーダは粗大体（ストゥーラ・シャリーラ）を構成している肉体の鞘に、さまざまな名前を付けています。

生気の鞘（プラーナマヤ・コーシャ）、心（マナス／マインド）の鞘（マノーマヤ・コーシャ）、英知の鞘（ヴィグニャーナマヤ・コーシャ）は、肉眼では見えない微細体（スークシュマ・シャリーラ）を形成しています。心はこの微細な姿をとってすべてに浸透しています。だから、「マノームーラム イダム ジャガト」（心は全世界の基盤である）と言われているのです。

歓喜の鞘（アーナンダマヤ・コーシャ／至福の鞘）は、原因体（カーラナ・シャリーラ）です。至福を体験するためには、人は5つの鞘すべてを超えていかなければなりません。その段階は、トゥリーヤと呼ばれ、熟睡している状態（スシュプティ）を超えた段階です。それは至高の原因の相（マハーカーラナ・スワルーパ）です。これは究極の霊的原理（パラマールティカ）です。この段階で経験する至福が本当の至福です。この至福は、五感や心や知性では得られません。

この至福を体験するのを邪魔する5種類の障害物（クレーシャ〔煩悩〕）があります。それらは、無知という障害（アヴィッディヤー・クレーシャ）、未熟という障害（アビナヴァ・クレーシャ）、留まることという障害（アスティタ・クレーシャ）、執着という障害（ラーガ・クレーシャ）、憎悪という障害（ドウェーシャ・クレーシャ）です。人間は、この5つのクレーシャのせいで、アートマのビジョンを得ること、アートマの至福を経験することができずにいます。

体に執着しすぎる人は、無知という障害（アヴィッディヤー・クレーシャ）に苦しみます。それはさまざまな欲望や病気を引き起こし、人生を惨めなものにします。未熟という障害（アビナヴァ・クレーシャ）は、自分の心をコントロールできないときに生じます。人は、過度に肉体を重視し、心の気まぐれに流されて、その結果、苦しみに置かれるのです。留まることという障害（アスティタ・クレーシャ）は世俗的な快楽への興味から生じます。執着という障害（ラーガ・クレーシャ）は、富と物品への執着から発生します。憎悪という障害（ドウェーシャ・クレーシャ）は、人の期待がくじかれ、欲望が満たされないときに生じます。

肉体の執着を手放す

帰依者の中には、見返りを期待して神を礼拝する人がいます。彼らは自分の欲望が満たされれば満足し、そうでなければ神をも憎みはじめます。彼らは自分が手に持っている幸運を楽しみません。それどころか、もっともっと、と自分が得るに値しないものを欲します。その結果、彼らはストレスにさらされます。現代では、母と子、夫と妻、兄弟同士の関係さえも、憎悪（ドウェーシャ）によって損なわれています。

歓喜の鞘（アーナンダマヤ・コーシャ／至福の鞘）以外の鞘は、人間を束縛し、障害物（クレーシャ〔煩悩〕）に服従させます。パラマールティカの原理（究極の霊的原理）を理解するには、心（マナス／マインド）を取り除くか、少なくともコントロールして、徐々に体への執着を捨てなければなりません。

体は五大元素でできており、いつかは滅びるもの
しかし、内在者は生まれることも死ぬこともない
内在者には、執着も束縛もない
実を言えば、内在者とは神である

（テルグ語の詩）

体への執着を手放さないかぎり、内在の神を認識することはできません。肉体への執着は、霊性の道における障害です。巨大な木が小さな種の中に含まれているのと同じように、5つの障害物は最も微細な形で体に深く根付いています。体への執着は、人間の不幸と心配と惨めさと平安の欠如の主な原因です。人は、体を道具と見なして、内在の神を意識して真実の人生を送らなければなりません。

まず、人間は、食物の鞘から生気の鞘へと向かう必要があります。生気の鞘は、体を動かす役割を担っているため、振動と呼ばれています。心の鞘とは何でしょうか？ 心（マナス／マインド）はすべてに浸透しています。心はどんな距離でも一瞬で移動することができます。人間には死がありますが、心にはありません。心は生から生〔今生から来生〕へとその人に付いていきます。

英知の鞘とは何でしょう？ 英知の鞘は物質世界とは結び付いていません。物質界は、反応・反響・反射と関連しています。例えば、あなたが手でテーブルを叩くとします。その時、テーブルもあなたを叩きます。作用があれば、反作用もあります。これはプラーティバースィカ〔姿形のみが存在するもの〕の原理です。プラーティバースィカに関連するものは、世俗的な現世の知識にすぎません。それは英知とは呼べません。真の英知は、統合意識を理解することにあります。それは、変わることのない永遠の至福へとつながります。これは、粗大体、生気の鞘、心の鞘、微細体、原因体という5つの鞘を超えた後にのみ、経験することができます。それから、あなたはトゥリーヤの段階（至高の原因の段階）に到達するのです。原因の段階を超えたものが至高の原因の段階です。この段階に到達するには、5つの鞘の性質をきわめて明確に理解する必要があります。

宇宙の原初の基盤

全宇宙には原初の基盤が存在します。ここに銀のお皿と銀のコップがあります。これらの基盤は銀です。品物の名前や形は変わっても、銀は同じままです。同様に、名前と姿形は必ず変化しますが、原初の基盤が変わることはありません。

アートマの原理は古来永遠
それは生まれることも死ぬことも、
始まりも終わりもない

（テルグ語の詩）

アートマの原理は、体と心と生命原理にとって、原初の基盤です。

海の水は太陽光線によって水蒸気になります。それから、水蒸気は雲になります。雲は雨という形になって地上に降り、川となって流れ下って、最終的に海に融合します（ナディナム サガロー ガティ）。海から生まれた川が最終的に海と一つになるのと同じように、神から生まれた万物は最終的に神に融合します。このことを、ヴェーダではムクティ（解脱）と呼びます。『バーガヴァタ』にも、生きとし生けるものが源に戻るのは自然の成りゆきであるとあります。個々の魂は神から生じ、必ず神に融合するのです。

アートマの原理は同一

愛の化身たちよ！ 霊性とは、周囲から隔絶した生活を送ることではありません。真の霊性とは、全人類は一つであることを理解し、執着と憎しみを捨てることにあります。アートマの原理はすべての人の中にあり、それらは皆同じものです。

アートマはどのような形をしているのでしょうか？ 砂糖には形がありますが、甘さの形を説明することのできる人がいるでしょうか？ 甘さは体験することができるだけで、説明することはできません。アートマの原理に関しても同じことが言えます。アートマの原理は、太古より存在し、永遠であり、属性を持たず、無形で、純粋で、汚れなく、不滅です。マイソール・パクや、グラブ・ジャムーン、バ

ルフィなど〔インドのお菓子〕は、名前や形はさまざまかもしれませんが、含まれている砂糖は皆同じです。同様に、名前と形は異なりますが、アートマの原理は同一なのです。

心の清らかさを得るべし

今日、人々はさまざまな霊性修行をしています。例えば、シュラヴァナム（聞くこと）、キールタナム（歌うこと）、ヴィシュヌスマラナム（唱えること）、パーダセーヴァナム（蓮華の御足に奉仕すること）、ヴァンダナム（崇敬すること）、アルチャナム（礼拝すること）、ダースヤム（神の召し使いとして奉仕すること）、スネーハム（友情を育むこと）、アートマニヴェーダナム（真我への全託）などです。しかし、これらは、外的で一時的な満足しか与えてくれません。どの霊性修行に一番効果があるかといった議論をするのは無駄なことです。眠ってしまえば、無料の宿坊であろうが、宮殿であろうが、どこで眠るかはほとんど問題ではありません。それと同様に、どんな修行をするにせよ、心の清らかさを得ることができればよいのです。ひとたび心がきれいになれば、人生でどんなことでも成し遂げることができます。

心を浄化するには、愛の原理を育てなければなりません。愛の光は決して消すことができません。ひとたび愛の原理を育てれば、あなたはヴィシュワ〔目が覚めている状態〕とタイジャサ〔夢を見ている状態〕とプラグニャー〔常に神と一つになっている状態〕という三つの状態を越えて、究極の至福に到達することができます。個々の魂は、目が覚めている状態では、グニャーネーンドリヤ（知覚器官／グニャーナ・インドリヤ）とカルメーンドリヤ（行動器官／カルマ・インドリヤ）と結び付いているため、ヴィシュワ〔全世界／すべて〕と呼ばれます。夢を見ている状態では、アンタッカラナ（内なる道具）の輝ける原理と結び付いているため、タイジャサ（輝けるもの）と呼ばれます。熟睡している状態では、プラグニャー〔常に神と一つになっている状態〕と呼ばれ、歓喜の鞘と結び付いています。

古代の優れた学者、アマラシンハは、神の原理を説明する多くの詩を詠みました。しかし、彼の神聖な性質を理解できかった一部の人々は、彼に苦難を強いました。彼らはアマラシンハに無神論者のらく印を押しました。アマラシンハは多くの苦しみを与えられ、著書のすべてに火が放たれました。アマラシンハの本が燃やされようとしていたその時、シャンカラが割って入り、『アマラコーシャ』を取り戻しました。『アマラコーシャ』は、もう一つのヴェーダのようなものです。それは、ほれぼれするような感動的な書物です。それほどの神聖な書物を抹消しようとするのは、全く愚かなことです。実際、人々はヴェーダや聖典の教えを理解しようとしません。そのせいで、人々は本当の自分を忘れてしまっているのです。

シヴァラートリに神の名を唱えること

皆さんが今日以外の日に体験する夜は、普通の夜です。一方、シヴァラートリ〔シヴァの夜〕は縁起の良い夜です。どうして縁起が良いのでしょう？ あなたが自分の時間を主の栄光を歌うといった縁起の良い方法で費やすから、縁起が良いのです。心（マインド）には16の相があります。月は心を司る神です。今日は月の16の相のうち15が欠けています。もしあなたが一晩中ずっと心を込めて神の栄光を歌うなら、残りの1つの相すらも神に融合させることができます。この日は、神を黙想することによって心を完全にコントロールすることができます。そのような訳で、今夜は縁起の良い夜だと考えられているのです。残念なことに、このカリの時代〔カリユガ〕においては、人々は一晩中映画を見たりトランプをしたりしてシヴァラートリの徹夜を過ごしています。これはシヴァラートリとは呼べません。今宵の一瞬一瞬を、神を想うことに専心し、心から神の御名を唱えるべきです。唱名は内面から生じるべきものです。それは内なる存在の反映と呼ばれます。

神には何千という名前があります。そうしたすべ

ての御名の中で最も重要で意義が深いのは「サッチダーナンダ」〔サット・チット・アーナンダをつなげて発音する御名〕です。「サット」は変わることのない永遠の原理を表し、「チット」は完全な意識〔完全なる気づき／覚醒〕を表しています。「サット」は砂糖に、「チット」は水に例えることができます。砂糖と水を混ぜればシロップ（砂糖水）ができます。同様に、「サット」と「チット」が組み合わさると「アーナンダ」〔至福／歓喜〕が生まれます。あなたのハートを愛で満たし、神の御名を唱えなさい。そうして初めて、あなたは神に到達することができます。あなたのすべての行いに愛を込めなさい。

愛は、源から、すなわちハートから生まれるものであり、強制から生まれるものではありません。今日、人々は神の御名を唱えますが、それはハートからではなく、強制によって唱えています。神の御名を唱えても、心を込めて唱えないかぎり何の恩恵も得られません。心を込めて、30秒でも神の御名を唱えなさい。それで十分です。スプーン一杯の牛乳のほうが、何桶ものロバの乳よりも優れています。神は量にではなく質に関心があります。

ずっと若くいる秘訣

学生諸君！ 肉体は道具にすぎず、行為をしている者、楽しんでいる者はアートマであるということを理解しなければなりません。肉体への執着を手放しなさい。皆さんは何のために勉強しているのですか？ 皆さんは、お金を稼いで幸せな生活を送りたいと考えています。しかし、皆さんは勉強から幸せを得ていますか？ いいえ、得ていません。皆さんは、学業を修了したらもうかる仕事に就きたい、それから昇給したい、というようなことを考えています。欲望には際限がありません。それでどうして幸せになることが期待できるでしょうか？ 本当の、永遠の幸せは、物質世界では得られません。それはトゥリーヤの段階でのみ体験することができます。至福は物質世界のものの中には存在しません。

ある日、アーディ・シャンカラ〔初代シャンカラ〕が、13人の弟子を連れてガンジス河に沐浴に出かけました。シャンカラは、一人のブラフミン〔バラモン〕が木の下に座って「ドゥクルンカラネー、ドゥクルンカラネー」〔サンスクリット語の文法〕と繰り返しているのを見かけました。シャンカラは、文法の基礎を繰り返して何が得られるかと尋ねました。そのブラフミンは、立派な学者になって、宮廷に仕え、お金を稼ぐことができると答えました。次にシャンカラは、その富はいつまで彼に幸せを約束してくれるかを尋ねました。ブラフミンは、自分が死ぬまで幸せな生活を過ごすことができると言いました。シャンカラは、死んだ後はどうなるのかと尋ねました。ブラフミンは、自分には分からないと答えました。すると、シャンカラは次のような歌を歌いました。

バジャ ゴーヴィンダム
バジャ ゴーヴィンダム
ゴーヴィンダム バジャ ムーダマテー
サムプラープテー サンニヒテー カーレー
ナヒ ナヒ ラクシャティ ドゥクルン カラネー

〔ゴーヴィンダを崇めよ
ゴーヴィンダを崇めよ
崇めよ、ゴーヴィンダを、ああ！ 愚か者よ
死の時間が近づいた時、
文法の基礎が助けにきてくれることなどない〕

いつでも、どのような状況の下でも、皆さんを守ってくれるのは、神の御名だけです。この世のものは、すべて通り過ぎていく雲のようなものです。至福と愛のみが永遠です。愛は神です。神は愛です。愛の中で生きなさい。

学生諸君！ 青春時代は非常に神聖です。青春時代は非常に神聖です。尽きることのない欲望に浸ったり空想にふけったりして青春時代を無駄に費やしてはなりません。神を心の最高位に据えつつ教育を追究しなさい。無用な活動や束縛に巻き込まれてはな

りません。それらは不安の原因となるでしょう。今日、人々は平安を探し求めています。しかし、外側の世界で平安（peace）を見つけることはできません。見つかるのは断片（piece）だけです！ 平安はあなたの内にあります。あなたは平安の化身です。あなたは真実の化身です。あなたは愛の化身です。ですから、まずあなた自身を知りなさい。そうして初めて、あなたはいつも至福に満ちていることができるのです。今の学生たちはさまざまな学位を取っています。しかし、それが何の役に立つのでしょう？

教養や理性があっても、
愚かな人は本当の自分を知らず、
心の卑しい人は自分のよこしまな性質を手放さない
現代の教育は、議論をもたらすだけで、
完全な英知はもたらさない
不滅をもたらすことができないのなら、
世俗の教育を得ても何になるだろう？
あなたを不滅にさせてくれる知識を得よ

（テルグ語の詩）

神だけが永遠

愛の化身たちよ！ すべてを愛し、誰も憎んではなりません。これは私たちの古来の文化の教えです。ヴィヤーサ仙は18のプラーナの真髄を短い言葉で述べています。「パローパカーラヤ プンニャーヤ パーパーヤ パラピーダナム」〔人は他者に奉仕することで徳を積み、他者を傷つけることで罪を犯す〕。ですから、「常に助け、決して傷つけない」、これを実行に移せば、それで十分です。世俗的な教育と共に、霊的な教育も欠かすことができません。「アーディヤートマ ヴィッディヤー ヴィッディヤーナーム」（霊性〔アートマ性〕の教育が真の教育）と言われています。それのみが、二元性と三属性、すなわちサットワ・ラジャス・タマス〔浄性・激性・鈍性〕を越えたブラフマンの知識を授けることができるのです。神のみが永遠です。それ以外はすべて一時のものです。今日、人々は世の中を信じていますが、神を信じてはいません。あなたの若さや体の美しさを得意がってはなりません。

あなたはどうするのですか？
自分がよぼよぼの老人になった時
体が弱くなった時
脚はよろめき、視力は衰え、
革製の操り人形も同然になった時
子供たちがあなたを年寄り猿と呼んで笑う時

（テルグ語の詩）

若さはいつまで続くでしょう？ 稲妻が閃光（せんこう）を放った後には一寸先も分からないような暗闇になるように、若さの後には老いがやって来ます。朝咲いた花も、夕方にはしおれてしまいます。人間の身体の性質もそれと同じです。自分の身心をコントロールしなさい。他の人々に依存してはなりません。あなた以外の誰かが食べ物を食べても、あなたの空腹は満たされるでしょうか？ そんなことはありません。霊性の道で向上するには、自分自身の努力がどうしても欠かせません。

いつまでも若いままでいたいなら、五感をコントロールすべきです。スワミがその直接の証明です。私の体は活力で満ちています。私にはまったく弱いところはありません。今でも、私は速く走ることができます。誰がスワミは75歳だと思えるでしょう？ その秘訣は何でしょう？ 純粋さ、忍耐力、根気が、その主な要因です。スワミの感情は常に純粋で安定しています。この点でスワミを見習うようにしてごらんなさい。

幸せは神と一つになることにある

皆さんは、自分はスワミの帰依者であると言っています。それなら、スワミの純粋さの、少なくとも何分の一かを身に付けることが、皆さんの務めではないでしょうか？皆さんは、誰かから何かの情報を教えてくださいと頼まれたとき、それに正しく答え

てあげる程度の忍耐も持ち合わせていません。一方、私は何千人もの人と話をしますが、常に平安を保ち、至福に満ちています。私は多岐にわたる活動に携わっています。私のしている仕事を説明できる人は誰もいません。私はあらゆる部門の仕事をします。すべての部門が私のものです。しかし、私は決して不安になることはありません。私はいつも至福に満ちています。誕生日のお祝いの間、何人かの帰依者は私のハッピー バースデーを祈ります。私は彼らにこう言います。「私のハッピー バースデーを祈る必要はありません。なぜなら、私はいつも幸せだからです。幸せでない人たちに幸せを与えてあげなさい」。幸せは、神と一つになることにあります。

もしあなたが、神はあなたの中に、あなたと共に、あなたの周りにいるという強い確信を持っているなら、決して、人生において困難や不幸に出会うことはないでしょう。人々は不安や不幸について語ります。しかし、私はそれらを知りません。私の純粋さのゆえに、それらは私に近寄りもしません。悪い思考や悪い人絡を持っている人だけが、不幸や不安に苦しめられるのです。ですから、

悪は見ず、善を見る
悪は聞かず、善を聞く
悪は思わず、善を思う
悪はなさず、善をなす

それが神に至る道

困難に直面したとき、意気消沈してはいけません。それは自分のためだと考えなさい。

帰依者の固い信念がバガヴァンの恩寵を得る

皆さんは、何分か前にこの壇上でスワミが一人の帰依者に話しかけていたのに気づいたでしょう。彼はナーラーヤナという名前で、チェンナイからやって来ました。先週、彼の心臓に問題が起こりました。彼の息子は私たちの大学の学生で、父親にすぐにプッタパルティに来るようにと電話をかけました。彼はここにやって来て、彼を診察した医師たちは、心臓の4つの弁が詰まっていて手術は難しいと私に言いました。アメリカから来た3人の医師が診察をしたのですが、実のところ、心臓にこれほど深刻な問題があるのにナーラーヤナが生きているということに驚いていました。

ナーラーヤナは医師たちに、自分に痛みはないし、スワミがいつも一緒にいてくれるのでとても幸せだと言いました。しかし、医師たちは満足しませんでした。医師たちは5時間かけて心臓の手術を行いました。4つのバイパス手術が行われました。手術は一昨日行われたのですが、彼は今日、マンディルにやって来ました。通常、バイパス手術の後は少なくとも10日間はベッドに寝ていなければなりません。ところが、ナーラーヤナすでに昨日300歩も歩きました。これは、とてつもないことではありませんか？ 今日、彼はズボンとシャツを着てここに来て、まるで大学生のように見えます。私は彼に、これは信仰心によるものですと言いました。彼は最初から、スワミが一緒にいて自分の面倒を見てくれると言い続けていました。彼は、心臓の問題は、それが自分をスワミの住まいに連れてきてくれたという意味で、自分にとって良いことだったと感じています。

私たちの病院は単なる病院ではなく、癒しの寺院であると、ナーラーヤナは言いました。彼の手術は一昨日行われましたが、昨日、医師たちは彼にイドリー〔米粉の蒸パン〕を出し、今日、彼はスワミのダルシャンを受けにマンディルに来ています。他の病院ではありえないことではありませんか？ どんな医者に聞いても、「ありえない」と答えるでしょう。それが人間の体というものですが、神はそれさえも変えて明るい未来を授けることができるのです。

神は、地を天に、天を地に変えることもできますが、そのためには、あなたは神を固く信じていなければなりません。今、人は信心という目を失って、盲目になっています。人は神を信じていません。自分のことを知らない人に、どうして神を知ることができるでしょうか？

神への愛を育みなさい

まず、自分のことを知りなさい。そうすれば、容易に神を理解することができます。神を信じなさい。神にできないことは何もありません。良い視力を持っている人は、小さな蛍さえも見ることができます。しかし、盲人は、まぶしく輝く太陽すら見ることができません。同様に、霊的な目を持っていない人は、自分の周囲が真っ暗に見えるのです。全宇宙を見るには霊的な光の閃光一つで十分です。

カリの時代は、カラハ（喧嘩）の時代になっています。至る所に喧嘩や争いがあります。学生たちは、憎しみと不安を根絶する決意をすべきです。このシヴァラートリの聖日に、愛の原理をもっともっと育みなさい。私は皆を愛しています。皆は私を愛しています。しかし、学生たちは時折、スワミは自分たちを怒っているから話しかけてくれないと感じます。私が誰かに怒りを持ったことは一度もありません。しかし、皆さんを正すために、私は時折、怒ったふりをすることがあります。病気になったら薬をもらう必要があります。さらには、食事療法もしなければなりません。そうして初めて、病気は治るのです。同様に、あなたの「病気」を治すために、スワミは独特な方法であなたに「薬」を与えます。あなた方に変化をもたらすために、私は時たま、あなた方に話しかけずに無言でいます。

憎しみ、貪欲、嫉妬心を育ててはいけません。皆さんは、神への憎しみを募らせたヒランニャカシプやラーヴァナ、ドゥルヨーダナがどうなったか知っていますね。パーンダヴァ兄弟は、神への絶大な愛を持っていたので、幸せな人生を送りました。数え切れないほどの困難に見舞われましたが、それでも、神への愛が衰えることはありませんでした。ですから、神への愛を育てなさい。愛を育てれば育てるほど幸せを体験し、あなたはさらに究極の至福へと近づいていくのです。

シュリ サティヤ サイババ述
2000年3月4日
マハーシヴァラートリ
プラシャーンティ ニラヤムにて
Sathya Sai Speaks Vol.33 Ch5

サイの御教え

神聖な気持ちを持って人生を聖化しなさい

2000年
マハーシヴァラートリの
ババの御講話②

太陽の光は、全世界を照らして、人々が自分の務めを果たすのを助けます。しかし、太陽は人の喜びや苦しみとは何の関係もありません。同様に、人が直面する無数の問題は、本人の感覚と心に関係しているのみであり、意識は無関係です。信者は神を探していると言われていますが、神はどこにでもいるのですから、信者が神を探しに行く必要はありません。実のところ、神こそが、ハートがそういった感覚の精神で満たされている真の信者を探し求めているのです。

熱い鉄の球に触れると、あなたは鉄の球で手が焼けたと言います。しかし、あなたの手を焼いたのは鉄の球ではありません。あなたの手を焼いたのは鉄の球の火熱です。この世は鉄の球と同じように、あなたが経験する苦しみや喜びの原因ではありません。神の力はあなたの中に存在しています。あなたはその力に気づかずに、自分の苦痛や困難を嘆き悲しんでいるのです。

神聖な思考を育む

現代人の性質は奇妙です。現代人は自分が思っていることとは別のことを話します。自分の中にある悪いものを隠すために、表向きは笑っています。また、表面的には泣いているように見えても、実は内心では笑っています。外見は人間のようで

すが、心は猿のようです。こうした偽善者や悪者は、決して神を見つけることができません。神は、人がそうした獣性をなくして、人間らしく生きることを期待しています。人間には清らかで敬虔（けいけん）な性質が内在しています。人は、動物的で不自然な資質ではなく、本来備わっているそうした清らかな感情を現すべきです。しかし、現代人は道徳的に堕落しつつあります。こういったあらゆる不自然な状況にあって、この世は陰気で生気のない場所になっています。

お金は失ってもまた稼ぐことができます。健康は失っても取り戻すことが可能かもしれません。しかし、時間は失ったら二度と取り戻せません。ですから、人は自分が自由に使える時間を正しい方法で活用すべきです。お金は使ったときにだけ減りますが、人の寿命は時間の経過と共に短くなっていきます。自分の頭の上には時間という鋭利な大刀がぶら下がっていて、いつ襲ってくるやもしれないということを、一人ひとりが自覚すべきです。その犠牲になるべきではありません。気をつけるようにしなさい。無駄にした時間は取り戻すことができません。健康やお金とは違って、時間は取り戻すことができないのです。

愛の化身たちよ！ 時間を聖化するには、徳の高い行いをすることです。善い行いは、もっぱら善い感情が引き起こすものです。そうした清らかで神聖な感情を養うべきです。雲は太陽によって生じるものですが、まさにその雲が太陽を覆い隠します。同様に、ハートから生じる思考の雲は、ハートを覆い隠します。つまり、源は、源から生じた要素に覆い隠されるのです。ブラフマンから生じたものは、ブラフマン以外の何ものでもありえません。創造の源は何でしょうか？ それは神の光輝です。それは神の意志です。神の意志が人間の存在の原因である以上、人は神の感情だけを持つべきです。神の意志から生じた創造世界は自然と呼ばれます。ですから、自然の産物である人間は、自然の特質を現すべきです。人間は、自然にとって異質な諸性質を持つべきではありません。欲望、怒り、金銭欲、執着、傲慢、嫉妬は、あなたが食べる食べ物から生じます。それらはあなたの過去世でのサムスカーラ〔傾向や特質〕の結果でもあります。それらはあなたの天性ではありません。

あなたは自分を「私」と言って紹介します。その「私」というのは神の最も重要な名前であり、それ以外のすべての神秘的な単語は後から発生したものです。ヴェーダの宣言「アハン ブランマースミ」（私はブラフマンである）における「私」〔アハン／アハム〕という文字は、ブラフマンを表しています。ですから、ブラフマンの1番目の名前は「私」です。2番目の名前は「アートマ」〔真我〕です。3番目の名前は「自分」です。「ブラフマー」は4番目の名前です。「神」は5番目の名前です。この5つは一なる神性の異なる名前です。これらの単語の本当の意味を理解すべきです。「私」はどこから来たのでしょうか？ 「私」は自分と神の姿そのものです。しかし、人は「私」を肉体と関連づけることによって、大変な誤用をしています。「私」は神聖な用途に使われるべきものです。

自分の本性を認識する

愛の化身たちよ！ 日々の生活の中で真実を貫くための方法と手段を知っておくようにすべきです。人々は真実の道を認識せずに、祈りや瞑想、ヨーガなどの霊性修行をしています。しかし、それだけでは十分ではありません。そうした霊性修行に加えて、善い感情を育む必要があります。善い性質、善い感情、善い行い、善い思考があなたの中に現れるべきです。これらは自然なままの神の特質です。自然があなた方の起源であるという真実にもかかわらず、あなた方は自然の特質を捨て、不自然な振る舞いを選んでいます。あなたはそのような不自然な生活を送るべきではありません。自分が思っていることを話し、話したことを実行すべきです。ヴェーダは述べています。

アンタル バヒシチャ タット サルヴァム
ヴィヤーピャ ナーラーヤナッ スティタハ
（すべてに浸透している神は、
内にも外にも存在する）

人間の真の研究対象は人間です。人間とは誰でしょうか？ 自分の思考と言葉と行いが一致している人が真の人間です。そういう人だけが人間と呼ばれることができるのです。神はそうした真の人間を探しています。神は外見だけが人間である人を探しているのではありません。

知性は鏡に例えることができる

人間には、自分の本性を認識することができるよう、神聖な知性が授けられています。知性は清らかで汚れのないものであり、鏡に例えることができます。鏡の裏側には化学物質が塗布されています。この化学物質がなければ、鏡に映った自分の姿を見ることはできません。鏡の後ろにある物が見えてしまい、鏡の前にある物は見えません。それと同じように、もしあなたが自分の本性を認識したいのであれば、あなたの知性を愛という化学物質でコーティングする必要があります。今、あなたは鏡に愛のコーティングをしないまま自分の姿を見ようとし、その試みに失敗しているのです。神は人間に、自分の姿を見るための知性という鏡を与えました。しかし、今、現代人は、知性という鏡の助けを借りて自分の本当の姿を認識しようとしていません。現代人は他人の顔に鏡を向けています。同様に、一人ひとりが自分の知性を使って外の世界を知ろうとしています。他人の所在を尋ね、自分の所在は知ろうとしません。ですから、「あなたは誰ですか？」と他人に尋ねるのをやめて、「私は誰か？」と自分自身に問いかけはじめなさい。

知性は、他人を見るためではなく、自分を見るために授けられているのです。人は、世俗的な事柄にどんどん関わっていくうちに自分の本性を忘れていきます。子供から大人まで、誰もが世俗的な事柄に没頭しています。現代人は、この世界のことだけでは満足せず、宇宙や星々のことも探ろうとしています。現代人は、内側には目を向けず、他の一切に目を向けています。宇宙へと何十万キロも旅をしているのに、自分のハートの奥へは1センチも旅をしません。そのせいで、現代人の感情は醜い方向に向かっています。現代人の中には利己心だけが見えます。現代人は自分の本性を悟ろうとしません。

自分の本性を知ろうと努力する

愛の化身たちよ！ 自分の本当の性質、生まれつきの性質に気づくことが、霊性の最大の目的です。この目的は、霊性修行だけに限ったものではありません。人間は、活動のあらゆる領域――時間の領域、倫理の領域、身体の領域、世俗の領域――で、自分の本性を悟るべきです。皆さんは他人の欠点を見つけることに熱心ですが、自分の欠点を知ろうとしません。自分の欠点を知ろうとするなら、自分を向上させることができるでしょう。そのような人は理想的な人間になるでしょう。そのような人だけが、本当の人間です。もしあなたが猿のように振る舞っていたら、誰があなたを人間として扱ってくれるでしょう？ 人々はせいぜい礼儀としてあなたに敬意を示す程度で、あなたがいない所ではいろいろとあなたを批判しているかもしれません。ですから、そのような道を歩んではいけません。自分の良心に従って行動すべきです。神聖な道を歩み、あなたの中にある神聖な性質を正しく役立てるようにしなさい。

愛の化身たちよ！ 世の中の無数の側面を探しにいく必要はありません。自分の本性を知るために努力すべきです。昨日、私は皆さんに5つの鞘（さや）の性質を説明しました。体は物質であり粗大なものです。体は数え切れないほどのトラブルの原因です。体への執着が増すと真我への執着は減ります。真我がなければ体は生きていられません。体への執着を少しずつ減らしていくよう気をつけるべきです。体への執着が増すと欲望や金銭欲も増します。

内なる目を発達させる

生気（プラーナマヤ）、心（マノーマヤ）、英知（ヴィグニャーナマヤ）という3つの鞘（コーシャ）から成る微細体は、輝けるもの（タイジャサ）と呼ばれます。なぜ、その名前を獲得したのでしょうか？ なぜなら、それは内側にある輝かしい思考や感情と結びついているからです。皆さんは、自分の存在のこの神聖な側面を認識すべきです。あなたが浸っている無数の世俗的な事柄は、あなたに刹那的な快楽を与えるだけで、真の永続する至福を与えることはできません。ですから、内なる目を発達させるべきです。外側の目は動物の目です。動物のレベルまで堕ちてはなりません。それは人間の本性ではありません。あなたの感情を清めるべきです。清らかで、揺るぎない、無私の知性を発達させるべきです。そうして初めて、あなたはすべての人を愛し、すべての人に奉仕することができるようになります。

しかし、現代人は自分を信じません。これは現代人の主な過ちです。まず、自分を信じるべきです。それが自信です。自信（自己信頼）は、人生という大きな家の基礎となるものです。自信という基礎の上に自己の満足という壁を立てることができるのです。自己犠牲がその屋根です。自己実現〔悟り〕という最高の至福は、この大きな家で得ることができるのです。

愛の化身たちよ！ 他人の欠点を見つけようとしてはなりません。まず、自分の欠点を自覚しなさい。自分の中に善い性質を育くむことをせず、ただ他人の善いところを見るだけでは、あなたの利益になりません。敬虔な気持ちを養いなさい。誰も憎んではいけません。なぜでしょう？

サルヴァタッ パーニパーダム タット
サルヴァトークシ シロームカム
サルヴァタッ シルティマルローケー
サルヴァマーヴルッティヤ ティシタティ
（手、足、目、頭、口、耳をすべてに行き渡らせ、
神は全宇宙に浸透している）

神性はすべての存在に内在しているのです。

今、広い視野を育てることが必要です。狭い心と自己中心的な感情を無くすべきです。利己心や私利私欲を捨てるべきです。目の大きさは3センチもありません。しかし、その小さな目は、空に浮かぶ壮大な星々を見ることができます。遠くの物体を見ることができるのです。それが目の力です。内なる目を育めば、もっと大きなものを見ることができます。ですから、広い心を持つべきです。多くの外国人はそれを「broad heart（広大なハート）」と呼びます。それは心臓が肥大していることを指す可能性があります。肥大した心臓は医者が治療するものであり、神が治療するものではありません。大らかな気持ちが現れてくるような、大らかな心を持つべきです。

神性は目に見えず、理解することはできない

学生諸君! あなた方はこの広大な宇宙に生まれました。そして、この広大な世界で生きています。ですから、広い気持ちを持つべきです。この広大な世界に生きている人間が、狭い気持ちを持っていてはいけません。他人の欠点を見つけることは間違っています。人には欠点があるかもしれません。でも、欠点を見るのではなく、良いところを見なさい。そうすれば、全宇宙は一つの家族になります。それが、人間は兄弟であり神は父であるという精神です。このような気持ちは、普遍的な兄弟愛を促進します。

ママイヴァームショー ジーヴァローケー
ジーヴァブータッ サナータナハ
（すべてのものに内在する永遠のアートマは、
私の存在の一部である）

神は全創造物の源です。神は創造物であり、創造主であり、宇宙の監督です。神は目に見えません。神を理解することはできません。あなた方は皆、神の映しであることを認識しなさい。そうすれば、あなたが誰かを憎んだり、誰かを妬んだりすることはなくなって、エゴはなくなるでしょう。

愛の化身たちよ！ 愛を養いなさい。愛は神です。愛に生きなさい。それがあなたの人生の目標であるべきです。愛よりも偉大な神はいません。もし誰かに「神はどこにいるのか？」と問われたら、神はすべての存在に内在していると答えるべきです。神の姿はどのようなものでしょう？ 愛が神の姿です。あなたはその愛の姿を認識し、完全な確信を持って他の人にそれを伝えるべきです。「愛」、「愛」、「愛」と言うだけでは十分ではありません。自分の振る舞いでそれを表現すべきです。そうしてこそ、尊敬と人望を集めることができるのです。それが、真の人間性を得るということです。

国に奉仕することに充実感を見いだす

学生諸君！

あなた方は若く、大きな活力を持っています。母なる大地のすべての力を持っています。大地のすべての力を持っているにもかかわらず、もし自分は無力だと感じるとしたら、それはあなたの弱さの表れです。国のどこかで災害が発生したら、いつでも駆けつけて人々を助けるべきです。その人たちを自分とは違う人間として扱ってはいけません。分け隔てを感じてはなりません。一つであるという気持ちを養い、社会奉仕に参加しなさい。

社会は自然の主要な一部です。手、鼻、目、胃、足が身体の一部であるように、身体は社会の一部です。社会は人類の一部です。人類は自然の一部です。自然は神の一部です。ですから、この真実を認識し、愛を持って社会奉仕に参加すべきです。そうして初めて、人生は成就を得ることができます。手や鼻といった部分は体に属しています。しかし、体は社会に属しています。ですから、体は社会のために奉仕すべきなのです。あなたの各部を活発に協調させて働くべきです。さまざまな人々のさまざまな必要を把握して、それに応じて行動すべきです。そうすれば、人々は恩恵を受けることができるでしょう。それこそが、真の社会奉仕です。

最近では、村に行って道を掃いたり、お寺の壁を白く塗ったりして、自分は社会奉仕をしたと満足している人が多くいます。それは、違います。それはあなた方の義務であり、奉仕とは見なすことはできません。本当の奉仕とは何でしょうか？ 村人たちが直面している主な問題を見つけなさい。好ましくない状況は何か？ 村人たちの差し迫った必要は何か？ 村人たちの必要を満たすために最善を尽くすべきです。次の季節は夏です。いくつかの村では飲料水が手に入りません。水は人間の命の綱です。井戸を掘るなり、他の水源から水を引くなりして、村人たちを助けるべきです。そのような実用性のある行いに従事するなら、自分は社会奉仕をしたと主張することができます。しかし、実のところ、そうした善い仕事を奉仕と見なすべきではないのです。もしあなたが自分は誰か他の人に奉仕していると感じるならば、それはあなたのエゴを助長することになりかねません。自分は身内に奉仕しているのだと感じるべきです。すべての人は人間です。すべての人は一つのカーストに属しています。それは人類というカーストです。すべての人は一つの宗教に属しています。それは愛という宗教です。一つの言語があるだけです。それはハートの言語です。こうした広い気持ちを養うべきです。そうして初めて、あなたが行う奉仕は真の奉仕となるのです。このようにして人々に奉仕し、あなたの教養と技能を有益で意味のあるものにすべきです。

教育の目的

教育の目的は、外国に行って富を築くことではありません。これはバーラタ人〔インド人〕の弱点です。学生は、工学や医学の学位を得た瞬間にパスポートを申請します。海外に行く代わりに、自分の村の人たちに奉仕しなさい。人々が海外に行くのは、お金を稼ぐためであって、善い性質を得るためではありません。あなた方は自分の文化を育てるべきです。ラーマは言いました。

ジャナニ ジャンマブーミシュチャ
スワルガダピ ガリーヤス
（母親と母国は天国よりも偉大である）

けれども、あなたは義務を遂行している間、ラーマを見習っているでしょうか？ ラーマは父の命令に従い、自分の王国を放棄して、14年という長い年月を森で過ごしました。あなたの体、知性、心は、両親からの贈り物です。あなたの頭、あなたの血、あなたの食べ物、あなたが使うお金も、すべて両親からの贈り物です。ですから、両親に感謝の気持ちを示すべきです。それは神への真の奉仕です。それはあなたに平安の真の奉仕を与えるでしょう。今、人間は原爆を手に持って「平和」、「平和」と叫んでいます。人間は宇宙を克服して月に到達しましたが、ハートの平和がありません。どうしたら平和になれるのでしょうか？ あなたのハートを神聖な気持ちで満たしなさい。原爆を捨てなさい。そうすれば、平和を経験することができます。平和は、あなたの内面が映し出されたものです。すべては内側からやって来るのです。

バーラタの神聖な文化に栄養を与える

愛の化身たちよ！ あなた方は善良で、高度な教育を受け、知的です。しかし、利己心があなた方のすべての善い性質を破壊しつつあります。一滴の毒で、容器の牛乳全部を汚染することができます。ですから、できるかもしれません。もし大規模な奉仕ができなくても、落胆してはいけません。あらゆる小さな集落一つひとつに足を踏み入れ、そこにいる人々の必要を把握しなさい。必要なお金や能力がない場合でも、心配することはありません。あなた方学生が協力して、手を取り合って一緒に働きなさい。団結すれば、この世には成し遂げられないことは何もありません。

今、バーラタ〔インド〕では、至る所で困難や苦しみ、悲しみや恐れを目にします。その理由は何でしょう？ 私たちは独立を達成しましたが、一体性を失いました。一体性の欠如が、そのすべての苦しみの原因です。兄弟さえも互いに争っています。まず、一体性を達成しなさい。それがあなたの人生の目標であるべきです。一体性が、あなたが始める仕事の根幹をなしているべきです。そうして初めて、あなたの学びのすべてが意味のあるものになるのです。あなた方は、MBA〔経営学修士〕やMFM〔財務管理修士〕やM.Tech〔技術修士〕に合格したと言います。すると早速、海外に職を乞いに行きます。物乞いがしたいのなら、ここで、自分の国でしなさい。外国で物乞いになってはいけません。外国で物乞いをしていると、あなたはここでも尊敬を失います。自分の国の幸福に気を配りなさい。

身をかがめて懸命に働く

あなたのお母さんは醜いかもしれません。それでもあなたは彼女を母親と呼びます。あなたを育てたのは彼女です。他人の母親のほうが魅力的で美しいからと言って、あなたは他人の母親を自分の母親として扱いますか？ あなた方は自分の国を貧しい国と呼んでいます。これは若者の弱さです。インドは決して貧しい国ではないということを知りなさい。インドで見つけられないものは、他のどこでも見つけることはできません。インドはすべての力を所有しています。ここはヨーガの国です。ここは徳高い行いの国です。近ごろ、人々はこれほどの偉大な国を刹那的な快楽の国に変えようとしています。快楽を追い求めるべきではありません。快楽は病気を生みます。犠牲によって、すべてを神に捧げるべきです。身をかがめて懸命に働きなさい。あなたの手は仕事に忙しく、あなたの心は善い感情で満たされているべきです。あなたがそうするなら、あなたより優れた人はいないでしょう。そのような人こそが本当の人間です。神はそうした真の人間を探し求めています。信者が神を探す必要はありません。神はどこにでもいます。そうする代わりに、自分の心を純粋で敬虔にするためにあらゆる努力をしなさい。偉い人ではなく、善い人になるべきです。偉い人と呼ばれている人たちから、世界は何を得ていますか？

学生諸君！ 得ていないなら、偉いと感じるべきではありません。真実を正しく理解しなさい。高学歴の人たちは、ほとんどが私利私欲に駆られているため、この国の困難、損失、苦しみの原因になっています。彼らは、国家の利益ではなく、自分の利益のために学問や技能を利用しています。インドには多くの偉い知識人がいます。この国をこのような残念な状態にしてしまったのは、彼らです。彼らは無私無欲とは正反対です。もし彼らに神聖な気持ちがあれば、国はあらゆる面で大きく前進したことでしょう。彼らは自分の知性を個人的な利益のためだけに利用しています。私たちの国には、1万ルピーの給料を受け取りながら、10ルピーに値する仕事さえもしていない人たちがいます。そのようにして、この国はどれだけ損失を被っているでしょう？ あなた自身に問いかけてみなさい。1カ月にあなたがした仕事は1万ルピーの価値がありますか？ しかし、そういう人は海外に行くと懸命に働きます。時間外の仕事さえもします。夜も働きます。外国でそのように働けるのなら、なぜ自分の国ではそうしないのでしょうか？ 広い視野を持って、自国への愛と神聖な気持ちを示すべきです。これは真の信愛です。信愛とは、神の写真を拝むことではありません。そうした行為は善行と見なすことができます。善良な気持ちを育むべきです。善良な気持ちがなければ、善行は有益な結果をもたらしません。

ポジティブな思考で心を満たす

愛の化身たちよ！ シヴァラートリにはどんな意味があるのでしょうか？シヴァは吉祥の象徴です。この日は敬虔な気持ちであなたの生活を聖化すべきです。皆さんは一晩中バジャンをしました。それは皆さんに幸せを与えました。しかし、それは聴いたり唱えたりという外的な活動だけに留められています。幸せはハートの奥底で感じるべきものです。

もし、あなたがネガティブな思考を抱いたままポジティブで建設的な活動に参加したら、それは何の役に立つでしょう？ まず、ネガティブな思考を取り除きなさい。あなたの心をポジティブな思考で満たしなさい。そうすれば、全世界が栄えるでしょう。社会が栄えるでしょう。あなたの村が栄えるでしょう。あなたの家が栄えるでしょう。社会奉仕は、個人から社会へ、社会から全国へと拡大すべきです。奉仕をしているとき、どんな違いも見てはいけません。どんな組織でもいいのです。それは問題ではありません。行って、参加しなさい。奉仕が目的です。犠牲が目的です。敬虔で神聖な気持ちを育みなさい。そうして初めて、あなたの人生は成就を得ることができるでしょう。

広い視野を持つ

多くの若者は、学業を修めた後、適した職に就くまで時間を無駄にし、数え切れないほどの問題に直面します。彼らは、政府が雇用を与えてくれないと非難します。政府はどれだけの雇用を作り出せるでしょう？ このまま雇用を与え続けていて、政府は国を運営できるのでしょうか？ さらに、従業員たちは給料の値上げを求めています。しかし、国庫は空っぽです。収入は見込めません。政府が税金を課せば、国民に嫌がらせをしていると言って人々に非難されます。もし政府が税金を課さなければ、どうやって国民の福祉を守ることができるでしょうか？ ですから、皆さんはこうした視点にも注意を向けるべきです。私たちの教育機関では、学生から学費を徴収していませんが、他の教育機関では、授業料や試験料などを上げると学生たちが反対します。学生たちは学費を下げるべきだと主張し、教師は給料を上げるべきだと要求します。政府はどこから資金を調達することができますか？ 国民から徴収し、国民の福祉のために支出するのです。税金がなければ、給料を払うことも、子供たちの教育のために使うこともできません。ですから、広い視野を持つことが必要です。

古代から後世へと保持されてきたインド文化は、他国に広がり、大きな栄光を手に入れました。ところが、今、インド人はそれを無関心に眺め、そうすることで国家と世界に害を及ぼしています。これほど長い間、自国の文化を持っている国は他にありま

せん。他の国は、今日はある文化に従い、明日には別の文化を採用します。しかし、インド人には、永遠で、清らかで、徳高い、ただ一つの文化があります。その文化だけが、皆さんが人間の本性を培うのを助けることができるのです。皆さんはこの真実を支持すべきです。人間的価値を育むべきです。発展のプロセスを科学と工業の分野だけに限定してはなりません。もし、さらに多くの産業を設け続ければ、環境汚染のリスクもますます高まるでしょう。ですから、あなたのハートの中にある神聖な気持ちを、最大限に育てていく必要があるのです。

お金は入っては出ていくが
道徳は入ってくると育つ

愛の化身たちよ！ あなた方は多くの知識の部門を学び、学位を取得します。学業を終えてプラシャーンティ ニラヤムを離れたら、両親の許可と助けを得て、村に奉仕しなさい。政府の仕事を欲しがらず、大衆に奉仕することを切望すべきです。もし、あなたが大衆に仕えるならば、大衆はあなたの福利の面倒を見るでしょう。あなた方は神聖な力を持っていますが、まるで自分は無力で弱いかのように振る舞っています。今、あなた方は友情と富と力を手に入れようとしています。しかし、あなた方は善い人格を育てていません。友情とは何でしょうか？ それはただの「Hello、Hello（ハロー、ハロー）」です。よく食べれば体力がつきます。一生懸命働くことで、たくさんのお金を稼ぐこともできます。けれども、あなたはこれらのためにだけ生きているのでしょうか？ これらはすべて流れゆく雲です。お金は入っては出ていきますが、道徳は入ってくると育ちます。美徳を養うべきです。年長者や役人を敬い、両親を愛するべきです。両親を信頼すべきです。先生を信頼すべきです。そうした神聖な気持ちを育むべきです。人間らしさと人間的価値は、あなたの中で芽生えます。それを育み、伸ばすべきです。人間的価値がなければ、あなたの学識はすべて無駄になってしまいます。満足は真の教養の印です。

もしあなたが他者を助けるなら、あなたは世界に理想を掲げることができるでしょう。理想は決して死にません。理想は溶けてなくなることもありません。理想は日々成長していきます。皆さんは理想を育むべきであり、それには青年期が適した年齢です。青年期は黄金時代です。この神聖な年齢を誤用してはなりません。正しい方法でそれを活用しなさい。そうして初めて、あなたのすべての学識は、実りある、価値あるものになるのです。

愛の化身たちよ！ 愛を育みなさい。何をするにも、愛の精神で行いなさい。愛がなければ、あなたの行いはすべて、神聖なものではなくなります。

シュリ サティヤ サイババ述

2000年3月5日
マハーシヴァラートリ
プラシャーンティ ニラヤムにて
Sathya Sai Speaks Vol.33 Ch6

シュリ サティヤ サイ ババ様 御生誕１００周年記念ヴィジョン

ハートの中におられる神様を絶え間なく憶念し
人類同胞愛という一体性の花を捧げます

第二の矢を放つな

SSSIOJ会長　住友正幹

あるテレビ番組で仏教の教えを分かりやすく紹介していました。仏教は言うまでもなく、約2500年前に悟りを開かれたブッダの教えに基づいた宗教ですが、哲学的な色彩を持っていると言えます。

ブッダが悟られた、苦しみから逃れる方法を一言で言い表せば「第二の矢を放つな」と言えるでしょう。第二の矢とは何でしょうか？

かなり以前のことですが、電車の中で見知らぬ女性から足を思い切り踏まれたことがありました。電車が駅に着きごった返した時だったと思います。「アッ痛い！」と激痛ともいえる痛みに一瞬、固まりました。当然、「大丈夫ですか？」とか「スミマセン」とか言われると思ったのですが、何食わぬ顔で出ていきました。

すると「なんて無礼な人だ」とか「一体どんな性格なんだ」とか怒りが湧いてきて収まりませんでした。今から何十年も前のことですが未だに良く覚えています。

仏教では最初に体に感じた痛みを「第一の矢」と呼び、その後の心に生じた怒りを「第二の矢」と呼ぶのだそうです。

普通、痛みと怒りはほぼ同時に生じますので、そんなことは考えません。分かりやすく表現すれば「痛いじゃないか（怒り）」になりますが、ブッダは体と心を観察し、五感を通して体に入ってくる感覚と、そこから生じる心の働きを区別し、人が苦しむのは心の働きにあることを見抜かれました。

足を踏まれて「痛い！」と感じるのは体の反応ですので仕方がありません。しかし、「なんて無礼な人だ」とか「一体どんな性格なんだ」となるのは相手とは関係なく、自分自身が作り出したものです。そのように想いが拡張することを、仏教では無用の分別という意味で戯論（けろん）というそうです。

戯論だかなんだか知らないが、足を踏んで謝らないのは非常識ではないか？と思われるかもしれません、しかし相手の立場に立てば、また違う想いを持っているかもしれないのです。

「後ろから押して倒れそうになったのに、足をよけないなんて、なんて無神経なのかしら」と憤っているのかもしれません。つまり相手は相手で憤りの反応をしていて、こちらはこちらで怒りの反応をしているのかもしれないのです。

「そんなのは理屈だ。相手はどうあれ、私は痛くて頭にきている、これは事実だ。」 確かにそうかもしれません。しかし、ブッダの教えに倣い、怒りという苦しみを生じさせないためには、感情のままに流されるのではなく、そこで踏み留まることが大切なのでしょう。

「およそ苦しみが生ずるのは、すべて識別作用によって起こるのである。識別作用が消滅するならば、もはや苦しみが生起することは有りえない」（ブッダの言葉　スッタニパータより）

もし、第二の矢を放たなければ、「痛てて……」だけで終わったのかも知れません。体は痛くても心に怒りが生じることはないのです。では、第二の矢を放たないようにするにはどうすれば良いのでしょうか？

仏教では、心と体を観察する練習が必要だと説きます。喜怒哀楽などの感情が生じた時に、それを観るもう一つの目を持つことがポイントのようです。そうして心が動いた瞬間を観察し、その因果関係に気づけるようになると、第二の矢を放つことはなく、心の自動反応から抜けられるようになるとのことです。

これは、体の痛みという触覚だけのことを言っているのではありません。体には五感が備わっており、外部から様々な情報がそれらを通して取り入れられます。それが様々な妄想を生じさせます。耳からは、他人からの中傷や批判が入ってくるでしょう。目からは暴力的なニュースが入るでしょう。その度に、

心を反応させていれば心は嵐になります。でも、怒りなどを生じさせてはいけないなどと言われると、「ちょっと私には無理、無理」と思われるかもしれません。でも、大切なことは生じさせてはいけないのではなく、生じた怒りを観察することなのです。それは喜ばしい反応であっても同様です。観察により心は静まります。

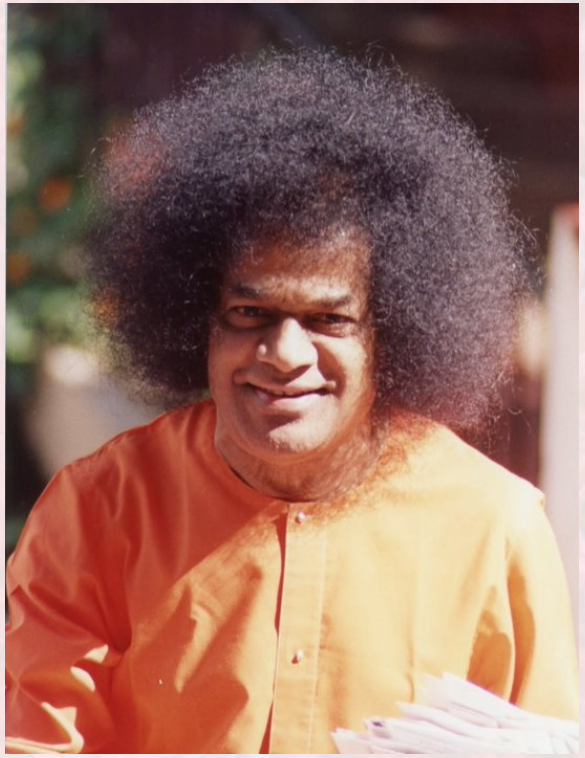
そうせずに、もし第二の矢を放てばどうなるかというと、きっとそれはさらに第三の矢を放つことにつながるかもしれません。

最初の体験に照らせば、「足を踏まれた」ことが、「なんという無礼な人だ」という第二の矢を放つことにつながりましたが、「こんなことで怒るなんて、私はなんて出来の悪い人間なんだ。私は全く人間の屑だ」などと、第三の矢を放ち、自己嫌悪を生じさせるかもしれません。

あるいは、「世の中はなんて無礼な人間ばかりだ。もうこんな地球なんかに住みたくない。よその星に行く」などと地球悲観論者になってしまうかもしれません。

しかし、すべては自分自身が創り出した不要な戯論（けろん）なのです。誰かに足を踏まれた痛みにより怒りが生じても、それに支配されないこと、そのためには心と体を観るという習慣を培うことが大切なのだと言えるでしょう。

また、スワミは、「あなたが見る世界はあなたの心の反映にすぎない」と説かれています。つまり、「あなたが愛の眼鏡をかけていれば、世界は愛なる世界に見えます。あなたが怒りの眼鏡をかけていれば世界は怒っているように見えます」と説かれていますので、思いやりや愛という眼鏡をかけていれば、足を踏まれても、「痛てて……」だけで終わり、怒りや憤りという第二の矢を放つことはないでしょう。第二の矢を放たないためには、心をいつも愛で満たすことと、そして心と体の観察をすること、そのどちらもが大切だと思われます。



サッティヤム シヴァム スンダラム 5

第47回

わが生命の主なる生命よ、〔中略〕
わたしはつねに、わたしの心から
いっさいの悪意を追い払い、
わたしの愛を花咲かせておくよう
つとめましょう
――わたしのこころの内なる聖堂（みや）に
おんみがいますことを知っているからです

〔R・タゴール著『ギタンジャリ』、レグルス文庫 p.32より〕

グルデーヴ・ラビンドラナート・タゴールはこう詠みました。帰依者がバガヴァン・ババに、自分の地元にババのマンディルを建てる計画を祝福してくださいと懇願すると、ババはよくこうおっしゃいます。

「あなたのハートが私のマンディルです。いつも清潔に、きれいにしておきなさい。レンガやモルタルでできたお寺は、私には何の慰めにもなりません」

時折、ババは帰依者にこうもお尋ねになります。

「いったいどうやってあなたは、この全宇宙を満たしている者の寺院を建てることなどできるのですか？」

けれどもやはり、「ババは自分の家族の見えざる師である」と信じている大勢の帰依者たちは、ババへの愛から、自分の家にババの聖堂を建ててきました。私たちは貧しい人のあばら屋にも、大金持ちの大邸宅にも、地球上の至る所に、そうした聖堂を目にすることができます。さらに、ババに捧げられた何百という寺院が、村にも町にも都市にも、次々に現れてきました。そういった、生身の人間を存命中に崇めようと建てられた寺院の数としては、歴史上、並ぶものがありません。こうした寺院の多くにババの全能の恩寵の印が現れて、さらに多くの無垢なハートに信仰の種を蒔いています。

一方、帰依者によって建てられた愛の殿堂もわずかに存在します。それらは、ババの生身の体に住んでいただくという幸運によって祝福されています。その中で最もよく知られているのが、プッタパルティのプラシャーンティ・ニラヤムのマンディル、バンガロールのブリンダーヴァンのマンディルです。この二つのアシュラムは、ババは一年の大半を過ごされる場所です。

ここで私たちは、ブリンダーヴァンの新しいマンディルの話を語るとしましょう。それは1984年に日の目を見ました。ブリンダーヴァンのアシュラムの発端を知る良い機会でもあります。

バンガロールはプッタパルティから南へ150キロ下った場所に位置しています。バガヴァンがプッタパルティに次ぐ二番目の住まいとしてお選びになったことにより、その最高の恩寵にあずかっています。

バガヴァンが初めてバンガロールにいらしたのは1944年2月、バガヴァンがまだ18歳の若者でいらした時です。シュリーマト・カラナム・スッバンマ夫人、彼女の兄のシュリ・パップル・サッティヤナーラーヤナ、そして、シュリーマト・カマランマ夫人と共に、スワミは、牛車に乗ってペンヌコンダの鉄道の駅までやって来て、それから列車でバンガロールに到着されました。

一行は、ラールバーグ近くのシュリ・マヴァッリ・ラーマ・ラーオの小さな家に10日ほど滞在しました。当時、そこにはカマランマの親戚とその友人が何人かいただけでした。自分はサイ・ババである

と宣言し、何もない所から品物を物質化したり、薬を使わずに病気を治したりしていた少年ラージュに会うために、彼らはプッタパルティを訪れていました。彼らはラーオの家に押し寄せましたが、そこにはババを拝見するための電灯すらありませんでした。彼らもババを自宅に招待しました。

1944年の間に、ババはさらに4度、その町を訪問なさいました。ババの神々しくも美しい姿でのダルシャンに一度でもあずかった者は、何度でも、ババがどこにいようとも、会いに行かずにはいられませんでした。ババがバンガロールを訪問される時はいつも、彼らの家はまるでお祭りのような雰囲気になって、彼らの心に新たな喜びが湧いてきました。ババはさらに頻繁にその町を訪問されるようになりました。ババはほとんどのお祭りが終わるたびにバンガロールへやって来られました。さらには、マドラスへの行き帰りにもいらしていました。

小さな家では、ババとババのもとに押し寄せる帰依者たちを収容することができなくなっていました。バンガロールの帰依者の中には、もっとたくさんの人がババのダルシャンにあずかれるよう、そして、木曜ごとのバジャンに参加できるようにと、ババに自分のバンガロー〔別荘〕に滞在してもらいたいと懇願する人たちがいました。

1944年の次の訪問の際、バガヴァンはチャーマラージャペートのシュリ・ナラシンハ・ラーオ・ナイドゥと、シュリ・ナヴァニータム・ナイドゥの邸宅に滞在されました。

1945年から1946年には、セント・ジョセフ・ロード沿いのシュリ・ティルマラ・ラーオのバンガローの広々とした屋敷が帰依者たちの安息所となりました。1946年から1948年には、バサヴァナ・グディの警視総監、シュリ・ランジョート・シンの邸宅がそうなりました。

1947年から1950年には、ブル・テンプル・ロード沿いのシュリーマト・サカンマ夫人の屋敷が祝福されました。1949年から1953年には、リッチモンド・ロード沿いのシュリーマト・ナーガマニ・プールナイアフ夫人の邸宅が、1949年から1953年は、ウィルソン・ガーデンにあるシュリ・ケーシャヴ・ヴィッタルの邸宅が、比類なき幸運にあずかりました。

1954年から1958年の間には、シュリ・ヴェーンカタラーマンとシュリ・シュリーニヴァーサンという、バンガロールで評判の二人の会計監査官が、バガヴァンを接待する機会に恵まれました。二人の住まいはどちらもクマーラ・パークにありました。

サイと共に

1998年7月23日の会話

学生の方に向かいながら・・・。

スワミ： 君はスポーツがしたいですか？

学生： いいえ、スワミ。

スワミ： （別の学生を指して）
彼はダンサーです。ブリンダーヴァンで踊りました。当時は小さかったけれども、今はキリンのように大きくなりました。
（その学生に）
君は今も踊っているのですか？

学生： はい、スワミ。

スワミ： 寮でですか？ 君が踊っているのを見たら、男子たちは怖がるでしょう。
（学寮の寮監に）
今日はあなたの寮の記念日ですね？

寮監： はい、スワミ。

スワミ： 記念日は来ては去ります。

寮監： スワミ、学生たちに話をしてください。

スワミ： （大学の学生たちに）
君たちの寮の記念日はいつですか？

学生たち：12月25日です、スワミ。
（バガヴァンは1980年のクリスマスの日にプラシャーンティ・ニラヤムの専門課程の大学寮を発足させました。）

スワミ： どうして知っているのかね？ 君たちの中で当時ここにいた人は、まずいません。もう20年になります。君たちはその時、生まれてもいませんでした。

さて、君たちは、今度の日曜日はプールナ・チャンドラに来ることができません。連続ドラマのためのセットをこしらえているのです。シヴァとパールヴァティがヒマラヤ山脈を降りてきて、シヴァ・ターンダヴァ（宇宙の舞）を踊るシーンが撮影されます。外でセットを作ってしまうと雨が降ったときに台無しになってしまう可能性があります。だから、私は屋内でやるようにと言いました。

学生たち：スワミ、どうか大学か寮に来てください。

スワミ： 大学では、君たちは椅子に座ります。プールナ・チャンドラに来るのとは違ってきます。プールナ・チャンドラでは、君たちは床に座って、お義母さん〔大学の男の先生〕がパコーダ〔野菜に豆粉で作った

衣を付けて揚げた天ぷらのようなスナック〕を出してくれます！
（ある学生に）
君はまだプールナ・チャンドラのセッションに来たことがないですね？

学生：　はい、スワミ。

スワミ：（ある教師に向かって、その教師のシャツについて）
その生地は何ですか？

教師：　スワミ、カーディー〔マハートマ・カンディーによって促進された手紡ぎの天然繊維生地〕です。

スワミ：それは何色ですか？ 浴室で使う布のようです！

教師：　スワミ、新品の時は鮮やかでした。今は色あせてしまっています。

スワミ：その服は何ですか？ サファリ・スーツ〔当時流行ったイギリスのサファリ・スタイルの上下で、上はブッシュ・コートやブッシュ・ジャケットとも呼ばれる〕ですか？

教師：　スワミ、これはカーディー・サファリ〔カーディー生地で作ったサファリ・スーツ〕です。

スワミ：どこで縫ってもらったのですか？

教師：　スワミ、アナンタプルのムスリム織機協会です。私たちはあるプロジェクトを行っていて、その時に購入しました。

スワミ：〔どこで生地を買ったかではなく〕どこで縫ってもらったのか？と聞いているのですよ。

教師：　サイ・テーラー〔プッタパルティの町に複数ある、仕立て屋の内の1つ〕です。

スワミ：縫い方が良くありませんね。

教師：　スワミ、素敵なカーディー生地です。ガンディー主義〔独立運動のための非暴力抵抗主義の象徴〕です。

スワミ：授業はどうですか？ あなたはどんな科目を教えているのですか？

教師：　総合農村開発です。

スワミ：農村開発とは何ですか？

教師：　村を発展させることです。SAI〔サイ農村開発というプロジェクトの名前〕はその出発点です。

スワミ：村落開発とは、村人たちに飲み水と衛生設備を提供することです。衛生状態が良ければ、健康も付いてきます。村人たちには、家の近くでドラムスティック〔モリンガとも呼ばれる木の実の部分のことで、太鼓を叩く棒のような形状をしている〕やココナッツの木、コリアンダーの植物などを育てることも教えなければなりません。これは村人たちの自給自足に役立ちます。

教師：　加えて、団結することも教えなければなりません。

スワミ：あなた方はそれらを村人に伝えていませんね。

Students With Sai: Conversations 1991 to 2000 pp.233-235より

ワカ チンナ カタ

サマルタ・
ラームダース

マハーラーシュトラのアウランガーバード地区のバーダルという場所で、神への信仰心がとても篤いある夫婦に息子が生まれました。その子はナーラーヤナと名付けられました。ナーラーヤナは腕白な少年に育ち、勉強もせずに他の子供たちと喧嘩（けんか）ばかりしていました。ナーラーヤナが8歳になった時、父親が亡くなりました。母親のラマーデーヴィーは、やんちゃな不良少年の息子が手に負えなくなってしまいました。親戚や近所の人たちは、責任感のある良い人間になるようにナーラーヤナを結婚させた方が良いだろうと助言しました。少年はまだほんの13歳であり、結婚するには若すぎたのですが、母親は他の人たちに説得され、息子の結婚を取り決めました。結婚式では、広く行われていた慣習に従って、花嫁と花婿の間に厚い布の仕切り幕が下ろされていました。プローヒト〔僧侶〕が花嫁の首に結ぶマンガラ スートラ（神聖で縁起の良い婚姻のためのより糸）を花婿に手渡すため、その幕を取り外しました。すると、びっくり！　花婿は、誰にも気付かれずにその幕の裏から姿を消してしまっていたのです。人々はそこら中を探し回りましたが、花婿は見つかりません。そのため結婚式を挙げることはできませんでした。

結婚式の会場から逃げ出した少年、ナーラーヤナは、最終的に聖なるゴーダーヴァリー川の水源の近くにある、ナーシクという場所にたどり着きました。そこでしばらく過ごした後、彼は近くのチットラクータと呼ばれる山へ向かいました。この山は、シュリ ラーマが12年近く住んでいたため、神聖な山と見なされていました。その山で、少年はパンチャヴァティーというとても美しい土地を見つけました。少年はシュリ ラーマが王国の追放期間に滞在していたその神聖な土地の雄大な景色に魅了されました。少年は絶えずシュリ ラーマの憶念に没頭しました。一体この腕白な少年が敬けんな若者に変容した原因は何だったのでしょうか？　突然、結婚生活の重責を負わされかねない窮地に立たされたショックから、隠れていた良いサムスカーラ（過去から積み重ねられてきた性向）が目覚めたという事実はさておき、ナーシクへ向かう道中で、少年は有名なハヌマーン寺院に立ち寄って、ハヌマーンの名声を高めた崇高な性質のすべてを自分に授けてください、と心の底から神に祈ったのです。するとご神像から自分の方に流れてくる穏やかな霊的バイブレーション〔エネルギー〕の気配がして、少年は神が自分の祈りに応えてくれたことを実感しました。

12年間に及ぶパンチャヴァティーでの厳しい苦行の末、ついにナーラーヤナはハヌマーンが得たのと同じように、シュリ ラーマの3つの悟りを開きました。1つ目の悟りは、肉体意識がある時はラーマが主人であり自分は召使い〔二元論〕であるということ。2つ目の悟りは、自分がジーヴァ（個人の魂）

であると意識した時、自分はラーマの一部（条件付き不二一元論）であるということ。3つ目の悟りは、自分がアートマ〔真我〕であると意識した時、自分とラーマは1つ（不二一元論）であるということです。この悟りを得た後、彼はパンチャヴァティーからナーシクに戻りました。ナーシクで、ナーラーヤナは国が深刻な食糧不足に陥っていることを知りました。そして、自国の人々が飢饉（ききん）に苦しんでいる時に、自分自身の解脱のことだけを考えて時を過ごすのは、実に身勝手なことだと内省しはじめました。そこで彼は「ディル・メー・ラーム、ハト・メー・カーム」（ハートにラーマを、手には仕事を）というスローガン〔標語〕を作り、自分のエネルギーと熱意のすべてを注いで社会奉仕に身を投じました。彼自身と献身的な仕事仲間たちに「マーナヴァ・セヴァ（人への奉仕）はマーダヴァ・セヴァ（神への奉仕）」、「グラーマ・セヴァ（村への奉仕）はラーマ・セヴァ（ラーマへの奉仕）」といった座右の銘を掲げたのです。ナーラーヤナは、自分のハートという湖をラームナーム（ラーマの御名）という聖水で満たしました。その水は、両手という蛇口から流れ出て、その国の大勢の人々の乾きを癒しました。

こうして村から村へと奉仕活動を続けながら渡り歩き、ラーマの御名を唱えながら、ナーラーヤナはついにインド半島南端にあるラーメーシュワラム〔聖地〕に到着しました。そこから彼は、巡礼の中心地であるティルパティ（彼がヴィシュヌ神であるヴェーンカテーシュワラ神のダルシャンを受けた場所）とハンピ（彼がシヴァ神であるヴィルーパークシャ神を礼拝した場所）を訪れました。最後にナーラーヤナはナーシクへ戻りました。

その道すがら、ナーラーヤナは聖者トゥッカーラームに出会いました。トゥッカーラームはラーマの栄光をとても美しい旋律で歌っていたため、マハーラーシュトラの統治者であったシヴァージーを含め、非常に大勢の人々が彼の歌声に魅了されました。シヴァージーはトゥッカーラームの歌を聴いて、自分は王国を捨て、心の底から霊性の道の探求にすべてを捧げる決意をした、とトゥッカーラームに告げました。トゥッカーラームはシヴァージーの霊性に対する狭い見識をいさめ、義務は神であり仕事は礼拝であると考えよ、と熱心に説き勧めました。そこで、シヴァージーはトゥッカーラームにイニシエーション〔霊性の手ほどき〕を授けてほしいと懇願しました。トゥッカーラームはそれを断り、「そなたの師は私ではなくラームダースだ。イニシエーションはラームダースからのみ受けるべきである」と言いました。すっかり落胆したシヴァージーは、自分の都へ帰って行きました。

ラームダースと呼ばれるようになったナーラーヤナがナーシクにいることを知ったシヴァージーは、大臣や高官たちを送り、極めて優れた人物にふさわしい音楽隊やその他の伝統的な儀礼を尽くして、ラームダースを王宮に招待しました。ラームダースが到着すると、シヴァージーは十分な尊敬と崇拝をもって歓迎し、ラームダースが王宮に滞在する支度を整えました。そして、ラームダースの御足を洗った後、その聖水を自分の頭に振りかけ、心の底から謙虚に服従しました。「おお、敬愛する師よ！　今この瞬間からこの王国はあなたのものです。そして、我が身もあなたのものです」。するとラームダースは即座に返しました。「わが息子よ、私はすべてを放棄して禁欲生活を送る苦行者だ。私には、そなたの限りある王国を手にする権利もなければ、そうしたいという願望もない。神の王国は無限である。私の人生の目標は、すべての人がその無限の神の王国へたどり着くのを助けることなのだ。それゆえ私はそなたの王国など欲しくない。たった今、そなたが差し出したこの王国の統治者として、私はそなたを王に任命しよう。これから先、そなたは一風変わった王になるのだ。この王国の真の支配者は神であり、そなたは神の道具、もしくは神の代りに王国の統治を任された管理人にすぎない、と考えよ」

ラームダースは数多くの素晴らしい物事を行う卓越した能力を持っていたため、彼の名はサマルタ・ラームダースとして知られるようになりました。

サマルタという名称は、「多才な技能を持つ者」という意味です。彼の人生の中のあるエピソードは、なぜ「サマルタ」という称号が彼に授けられたのかを物語っています。

ラームダースは、よくコーダンダパニ（弓矢で武装したラーマ）のような格好をしてあちこち歩き回っていました。ある日、その格好でゴーダーヴァリー川の岸辺を歩いていると、沐浴をしていたブラフミン〔僧侶階級の人〕たちが、ラームダースに、コヤ族（山間部族に属する狩人たち）の集落の者かどうかを尋ねてきました。ラームダースは、自分はラームダース（ラーマの召し使い）であってコヤの者ではない、と答えました。するとブラフミンたちは、もし彼がただのラーマの召し使いであるのなら、なぜラーマのような格好をして弓矢を身に付けているのかと尋ねました。ブラフミンたちは次のように言ってラームダースを問い詰めました。「ただ見かけだけコーダンダーパニを真似ることに何の意味があるのか？ おまえはラーマのように弓矢を扱う能力があるのか？」と。ちょうどその時、彼らの頭上のとても空高いところを一羽の鳥がすばやく飛んで横切ろうとしていました。ブラフミンたちはその鳥を指差して、ラームダースに「おまえはあれを射抜くことができるのか？」と尋ねました。ラーマの御名を口にしながら、ラームダースが即座に飛んでいる鳥めがけて1本の矢を放つと、鳥は真っ逆さまにブラフミンたちの目の前に落ちてきました。その死んだ鳥を見て、彼らは次のように言ってラームダースを責めました。「おまえには思いと言葉と行動の一致がない。それゆえ、おまえはドゥラータマ（邪悪な人）だ。ラーマの御名を唱えながら、おまえは己の技を見せびらかすために罪のない鳥を殺生するという罪を犯した」

自分はただあなた方の示唆に従って鳥を撃っただけです、とラームダースが返答すると、ブラフミンたちは次のように言って抗議しました。「もし我々がおまえに草を食べろと言えば、おまえはそうするのか？　おまえには自分自身の考えや識別力というものがないのか？」

そこで、ラームダースは穏やかに答えました。「お坊さま方、過去は過ぎ去りました。今、私がどうすれば良いのか教えていただけませんか？」。ブラフミンたちは、彼に罪を悔い改めるようにと言いました。ラームダースはすぐに目を閉じて、心の底から神に祈り、自分の罪を悔い改め、神の許しを乞いました。それからラームダースは目を開けると、ブラフミンたちに指摘しました。罪を悔い改めたにもかかわらず、死んだ鳥は生き返らなかったと。ブラフミンたちは、とがめるように言いました。「おまえはなんと無鉄砲なやつなんだ！ 悔い改めたからといって、おまえのしたことが帳消しになるはずがなかろう。悔い改めるということは、この先、二度と同じ過ちを繰り返さないよう覚悟することなのだ」。「恐れながら、私の見解ではそれは『悔い改め』ではありません」とラームダースは反撃しました。「神と神の御名の力はとてつもなく強いため、もし私たちが心の底から祈るなら、神の恩寵はその鳥を生き返らせることができます」。そう言いながらラームダースは死んだ鳥を拾い上げ、胸に抱きしめ、頬を伝う涙を流しながら心を込めて祈りました。「おお、ラーマ！　もし私が心とハートと魂のすべてを込めてあなたの御名を唱えてきたのであれば、もし私がこの鳥を殺そうと意図したのではなく、無知ゆえに殺してしまったのであれば、どうかあなたの恩寵により、この死んだ鳥を生き返らせるか、さもなければ、この鳥の命と共に私の命も取り去ってください」。ラームダースが祈りを終えると、彼の手の中で鳥が羽ばたきしました。それから、ラームダースは目を開けて、全能の神に感謝の祈りを捧げ、その鳥を大空へ放ちました。

この奇跡にびっくり仰天したブラフミンたちは、声をそろえて叫びました。「畏れ多きお方よ、あなた様の偉大さに気付かなかった我々をお許しください。あなた様が一本の矢で飛んでいる鳥を撃ち殺す能力を持ち、その死んだ鳥を生き返らせる能力をお持ちなのであれば、これから先、あなた様は自らにふさわしい『サマルタ・ラームダース』という名で

知られるようになるでしょう」

その後、ラームダースはパンダリプラムを訪れ、そこで、理想的な親孝行の方法を目（ま）の当たりにしました。プンダリカという名のある男が、自分の両親に対する奉仕を終わらせるまでの間、パーンドゥランガ神本人を自宅の前で一対（2個）のレンガの上に立って待たせたまま、本当の神に対するように自分の両親に先に奉仕をしたのです。

それから、ラームダースはシヴァージーの許を訪れ、シヴァージーが王としての務めを果たすのを導く3つの物を授けました。１つ目はココナッツでした。それは、ココナッツを買う目的が固い殻の中の乳白色の実を食べることにあるのと同様に、王国を所有し統治する目的は、王自身がサットウィックな（純粋な）生活を送り、その浄性の資質が国中に広まるのを確かなものにすることだと覚えておくためでした。2つ目は一握りの土でした。それは、王と王を通して彼の臣民が、母国であるバーラタの神聖さを思い出せるようにするためでした。3つ目は一対のレンガでした。それは、レンガが住人の安全を守り、家を建てるために使われるのと同様に、王は人々を守り、人々の幸福と発展を促すために自分の権力を使うべきであることの象徴でした。

この時、ラームダースの心に両親に献身的に仕えていたパンダリプラムでのプンダリカの姿がよみがえり、年老いた自分の母親に仕えたくなった彼は、急いで故郷の家に帰りました。ラームダースが家に着いた時、彼は長いあごひげを生やし、見慣れぬ服装をしていたため、母親にはそれが自分の息子であることが分かりませんでした。ラームダースは、自分は息子のナーラーヤナであり、世間ではサマルタ・ラームダースとして知られている、と告げました。それを聞くやいなや母親はとても喜んで叫びました。「ああ、最愛の息子よ、ラームダースの噂はたくさん聞いていました。長い間ずっとそのお方に会いたいと思っていたのです。けれど、それが私の息子、ナーラーヤナの有名になった名前だとは知りませんでした。あなたのことをとても誇らしく思います。このような偉大なお方の母親にしてくださった神様に感謝します。私は人生の目的を果たしました」。そう言って、母親は息子の膝の上で最期の息を引き取りました。

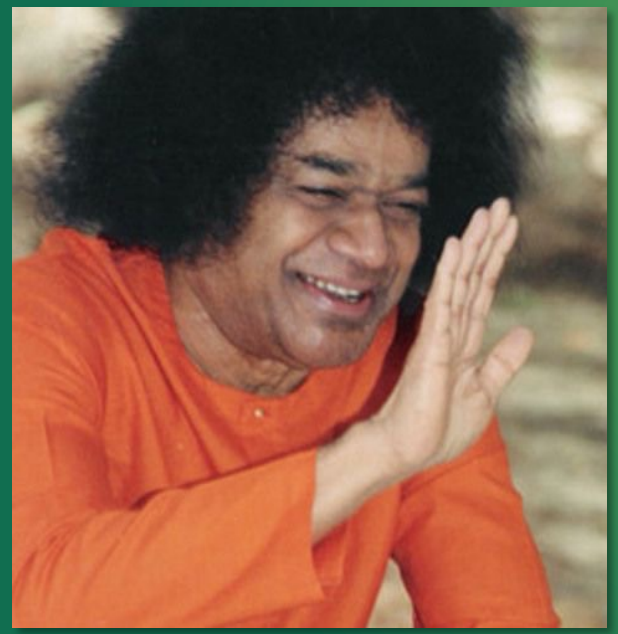
ラームダースは、定められた通りに母親の葬儀を執り行いました。それからまもなく、西暦1680年（西暦1674年にラームダースがシヴァージーを王に任命してからほんの6年後）に、ラームダースはシヴァージー王が逝去したことを知りました。ラームダースはシヴァージーの都を訪れ、シヴァージーの息子を王に任命して、気高い父親の跡を継いで王国を統治するよう祝福したということです。

※サマルタ・ラームダース（1608 - 1681）
シヴァージーの師であった聖者。詩人。西インドのマラーター（現在のマハーラーシュトラ州）出身。クリシュナ川でラーマ像を発見した。税金を使ってラーマ寺院を再興したため投獄されたバクタ・ラーマダース（1620 - 1680）とは別人。

『ワカ チンナ カタ』とは「ある小話」という意味のテルグ語で、ババ様が御講話の中で話された、たとえ話や物語です。

＜活動報告＞

スタディー サークル



開催日：2021年10月3日（日）
テーマ：「霊的求道者の４種類の態度」
参加者：40名

質問：
①すべての行動や結果が神のおかげであるという全託と、行動の責任を回避する回避主義とをどう区別して全託に向かえば良いのか？
②行動を実行する前に主の祝福と承認を求めるために、どのようなステップを踏むべきか？
③全託が最善の策であると実感した体験は？どんな気づきが得られたか？

＜導入スピーチ＞

スワミ※１は、カリユガ※２である現代において、神に到達するための最も簡単でシンプルな方法は、ナーマスマラナ(神の御名の憶持)であると宣言されました。それは、帰依をもって主の甘露のような御名を唱えることです。では、帰依とは何であり、帰依者とは誰のことでしょうか？

スワミは、「bhakthi・バクティ」は「bhaj・バジ」という語源に由来しているとおっしゃいます。それは奉仕の精神を意味します。それは愛の主要な原則を示しています。バジという語源には多くの意味がありますが、他の意味は「歌う」、「賛美する」ということです。

では誰が帰依者であるのでしょうか？スワミは兄のシェーシャマ・ラージュ※３に宛てた手紙の中で、真の帰依者とは喜びにも苦しみにも平然としている人のことであると宣言しています。これは、神に完全に全託することによってのみ達成されるものです。ラクシュマナ※4は、主への完全な全託の一例です。ラーマ※５、シーター※6、ラクシュマナが森にいたとき、ラーマはラクシュマナに小屋を建てるように頼みます。ラーマはラクシュマナに、自分の好きな場所に小屋を建てるように言いました。これを聞いたラクシュマナは泣き崩れ、ラーマに「なぜ私にそんな厳しいことを言うのですか？私はあなたに全託しているので、自分では何も選べません」と言いました。(Sri Sathya Sai Speaks, Vol 31 (1998)). しかし、どうすればこのような全託の状態を達成できるのでしょうか？バガヴァッドギーター※７では、4つのタイプの帰依者について書かれています。

1. アルタ※8
2. アルタールティ※９
3. ジッグニャース※10
4. グニャーニ※11

です。これらの4つのタイプの帰依者は、祈りにおいて、「なぜ」「何を」「いつ」「誰を中心とした行動なのか」を考えることで分類されます。

4つの帰依者のタイプの分類

１、アルタの帰依者

アルタの帰依者とは、痛みや苦悩があるときにだけ主に祈る人のことです。このタイプの帰依者にとっては、なぜ祈るのかというと、自分が痛みや困難を経験しているからです。何のために祈るのかというと、救済のためです。いつ祈るかというと、困難を経験しているときだけです。そして、行動もまた、自分の幸福だけを中心にしています。

２、アルタールティの帰依者

アルタールティの帰依者とは、物質的な富や名声などの欲望を満たすために主に祈る人のことです。彼らは主と取引をしているようなものです。この欲望を満たされたのなら、このプージャ(供養)やサーダナ（霊性修行）を行うと言います。このタイプの帰依者は、なぜ祈るのかというと、自分の物質的な欲望が満たされることを望んでいるからです。彼らが何のために祈るのかというと、物質的な欲望のためです。いつ祈るのかというと、主に何かを求めているときだけです。そして、その行動もまた、自分の肉体的な幸福だけを中心にしています。上記の2つのタイプの帰依者は、サムサヤートマ、つまり疑いをもっている人と呼ぶことができます。彼らの信仰は、彼らの願いが叶うことに比例して強化されます。もしそれが実現しなければ、彼らは主の力を疑うのです。

３、ジッグニャースの帰依者

ジッグニャースの帰依者は、どちらかというと探検家に近い人々です。主への信仰を持ち、神についてもっと知りたいと思っています。いつも聖なる人たちと共にいて、主をもっと知りたいと思っています。このタイプの帰依者は、なぜ祈るのかというと、もっと知りたいと思うからです。何のために祈るのかというと、神を体験するためです。いつ祈るのかというと、自己を体験しているときです。そして、その行動は、世界の幸福と主を喜ばせることを中心としています。

４、グニャーニのタイプの帰依者

グニャーニのタイプの帰依者は、完全に自己実現している人々です。彼らは至高の自己の知識を持ち、サット チット アーナンダ（絶対実在・純粋意識・至福）の原理を理解しています。このタイプの帰依者は、なぜ、何を、いつ、祈るのかというと、主に完全に全託した状態で至福を経験し、その中に留まりたいと思っているからです。そして、主を喜ばせることを中心に行動します。

「ラーマーヤナ※12」には、帰依者のタイプの違いを表した美しいエピソードがあります。さまざまな戦士たちが母なるシータを探しに行くとき、ラーマはハヌマーン※13に指輪を与え、彼がラーマの信頼できる戦士であることを示しました。インド洋のほとりで、ニラ（インドとランカーの間に橋を架けるのに貢献した技術者）、ジャーンバヴァン（熊の戦士）、ハヌマーンが座って会話をしていました。ニラはハヌマーンに尋ねました 。なぜラーマはあなたに指輪を与えたのか、そしてなぜあなたはそれを受け取ったのか？ 母なるシーターがどこにいるかもわからなかったのではないだろうか？でも、なぜ指輪を受け取ったのか？ジャンバワンは、ジャターユ※14が話したこととシーターの宝石の痕跡から、シーターが南の方角に連れて行かれたことがわかっていると言います。これが、主が我々のグループに指輪を与え、かつハヌマーンが主が信頼する帰依者であったために、その恩恵を受けた理由かもしれません。一方、ハヌマーンは、もし主が私に指輪を与えてくれたのなら、主が私を選んでくれたのだから、私は成功するだろうし、任務を完了するための力も授けてくれるだろうと言います。ここでニラは、最初の2つのタイプの帰依者、またはサムサヤートマ（疑いをもつ者）に分類されます。ジャンバワンはジッグニャース、つまり主を見つけるために探求し、理性を働かせようとする帰依者に分類されます。ハヌマーンはグニャーニの象徴です。彼は主に完全に主に全託しており、疑いをもっていません。「マハーバーラタ※15」や「バガヴァットギーター※16」の中においてさえも、アルジュナ※17は

帰依者としての最初の段階から最後の段階への移行と上昇を表現しています。まず、主に来てください、困難から救ってくださいと祈ります。そして、主に勝利を得て王国を獲得できるように導いて欲しいと祈ります。疑問が生まれたとき、彼は質問を始め、行動と結果の概念を理解しようとします。最終的に、彼は神なるアートマに関する至高の知識を得て、「Karishye vachanam Tava」（あなたの言葉は私にとっての命令なのです）と言って主に完全に全託します。私たちが揺るぎない信仰をもち、スワミの真の帰依者となれるように、スワミに祈りましょう。

＜参加者のコメント＞

「全託と怠惰と、どちらの状態であるのか迷うことも多いが、全託できた時は必ず至福がある。センターでセヴァ（奉仕）をする時、私は時間がないのでスワミに全託して行うことが多い。すると必ず自分で考えたりするよりも素晴らしい結果に導かれるという経験を幾度もいただいている。体験を通じて、少しずつ身体で分かってきたように思う。まだ全然ダメだが、ちょっとずつセヴァをとおして導かれていると思う。」

「その時々、自分ができることに最善と努力を尽くして、その結果はスワミに委ねるのが全託だと思う。自分の考えを押し通すのではなく、周りの人の意見をよく聴くこと。例えば10人の仲間がいれば全員の意見を聞いて収まったことが良い結果になる。そういった時にスワミの御心と一致したと感じることがよくある。」

「何か行動する前に神様の祝福とか承認を求めることがあまりなく、悪い行いはそれに応じた結果が得られるだろうと思うので避ける。良い行いはまた然り、当然祝福をしてくれると思っている。」

「以前、テレビ番組でヒマラヤに住んでいる少数部族を現地取材した番組を観た。ものすごく厳しい環境の中でチベット族があらゆることを神を中心に行い、生活している。そこの人々が本当に明るく純粋で笑顔が絶えない。そして自分たちは最高に幸せだと話している。それを見て、ここの人々は神への全託の中で生活しているからこんなに幸せなのだ、厳しい環境の中でもこんなに幸せなのだと感じた。常に神が自分の傍にいて、忘れることがない。そういう日々を送れたならば全託した生活になると思った。」

「スワミを知って30年近く経つ。大きな出来事はスワミに決めてもらうことにしている。大きな決断ほど、自分の考えが正しいかどうかわからなくなる。スワミのからの答えは、たいていは夢の中や朝起きた時にやってくることが多い。また家族や周りの人に相談して、誰か一人でも反対意見があれば、私は今はそれをしない方が良いと思って行動に移さないことにしている。」

「コロナ以前、不登校の子供が二人いた。学校が今日で最後かもしれないよ、だから今日くらい行っておいで、と言って、子供を送り出していした。これまでありがちな回避主義で何も考えずいろいろやってきた。センターにも15年も行っていなかった。本当にいろいろと毎日大変だったが、私にとっての全託は、一切の世俗の悩みを忘れてヴェーダ※18を唱えたり、バジャン(神への讃歌)やスタディーサークルに参加したりヴァーヒニ※19を読んだりすることが自分にとっての全託で、そうすることで自分の中のネガティブなものがなくなって、状況が徐々に変わっていくのではないかという気がしている。」

＜サイの学生のコメント＞

「全託とか回避主義には、それぞれに面白い起源がある。例えばスワミは『人々が少し間違った行いをしてから面倒をみてくださいと祈ることは、人々はそれを全託と呼ぶかもしれませんがそれは違います』とおっしゃっている。インドのバールヴィカス（子供の開花教室）の授業ではまず行動についての判断基準を学び、しかる後に全託を学ぶ。行動のための4項目チェックリストがある。1番目の項目は『自分がやろうとしていることが国の法律に違反しないか。』2番目は『倫理とか社会の共通認識に反しないか。』3番目は『誰かを傷つけたり、調和を乱すことにならないかどうか。』４番目は『自分の両親を喜ばせるかどうか。自分の行動が家族や親戚に影響を及ぼさないだろうか。』これらの項目に照らし合わせ、正しい判断基準で行った後、全託をするといった順番になっている。行動自体のために全託をするのではないということを理解するのが大切。逆に回避主義は、行動する前に何の祈りも必要としていない。回避主義者は自分がどんな行動をしても、その結果についても責任はないという主義であること。行動の結果を負いたくない人は回避主義に陥る。全託と回避主義はそれぞれに関連している。人間の性質として、何か悪いことをしてしまうと反省して、今度は神に全託しますと言って良い方向に向かうことがあるからだ。回避主義が多くの人間の性質となっている。悪い思いを抱くとその人に悪いことが起こったりすることがあるが、それは自分のせいではないと回避したくなる。そのように回避主義は思いの中でも行われる。」

「全託について、スワミと学生のエピソードをお伝えしたい。2007年のアティ・ルッドラ マハーヤグニャ(アティ・ルッドラ大供犠祭)※20の時にスワミが『全託の本当の意味とは何なのか？』と尋ねられ,その答えとして『喜びも悲しみも神からのギフトとして受け取る人が本当に全託した人です』とおっしゃった。スワミ ヴィヴェーカーナンダ※21の例を挙げる。スワミ ヴィヴェーカーナンダがシカゴで神の栄光を語る機会があった。しかし彼にはシカゴ行きの旅費がなかった。それでもどうにかして他の帰依者がお金を工面してくれ、シカゴに着いたが、そこに知人は誰もおらず、宿泊所を見つけることも難しかった。また3日間、何も買うこともできなかった。それでもスワミ ヴィヴェーカーナンダは自分自身の成すべき義務にフォーカスしていた。すると、食事の提供者が現れた。その人が言うには、夢の中にラーマ神が現れ『私の帰依者がお腹を空かせているから食べ物を与えるように』と告げたということだった。スワミ　ヴィヴェーカーナンダが状況に全託していたので、恩寵により神の栄光を広げることが出来て、神の祝福も得ることが出来た。全託とはいかなる行動も神が面倒みてくださると信じてそれを行うこと。」

「常に神様との関係によって、相互交流が築かれなければならない。それは『九つの帰依の道』のどれを実践しても良いと思う。そして、然る後にスワミの御教えに従って、思いや行動がそこにあるべきで識別力が鍵だと思う。そしてスワミの原則に従って発展していく。それから私たちの行動に応じて、スワミが幸せであるかを考える。結果にとらわれることなく行動すれば、結果を平静に受け止めることができる。またもう一つのポイントは、『選択』や『決意』に基づいた全託。時にどれほどいろいろ考えを巡らせた後でも、実際にそれを行うべきかどうか分からない場合もある。また、別の状況においては、結果が私たちのコントロールを完全に超えていることもある。この二つのような場合では、全託が最善の策だと思う。どのような選択をするにしても、スワミへの完全な信仰が大事。多くの学生が、自分の進路をスワミに直接伺ったことがあった。そういう質問をすることは完全な全託。スワミがおっしゃるすべてを受け入れる必要がある。また『自分は博士課程に進むべきでしょうか、進まないべきでしょうか？』という質問をしたケースでは、スワミの『博士課程に進みなさい』の指示に従ったが、実

際には自分には続けられないと感じたりした学生もあった。同様に、実際にスワミから同意を得た後でも、違う道に変更してしまったケースもあった。そういう場合でも、後になってから学生がスワミを訪ね『自分はやはり博士課程へ行きたいので、祝福してください』と嘆願した。自分たちが決断してスワミに祝福をいただく場合でも、あるいはスワミに最初から全託する場合でも、どちらもスワミは祝福をしてくださる。スワミはどちらにしても、その時点での決意というものを尊重してくださる。」

「神様は全知全能で遍在でいらっしゃるので、どこにいてもうかがいを立てることができる。誰もがそのようにできる。どのような仕事をする前にも、神様に質問することができる。例えば、セヴァの場合なら、それをしないような促しがあれば、それをするなということ。セヴァであれば、その行いをすることによって霊的な活動に従事することになる。その時、どんなセヴァを自分が行うのかはそれほど重要ではないが、実際にセヴァが自分にどんな影響を与えるかということが重要。自分が行っていることが他者の良かれのためになっているのかどうかという尺度。それがイエスであればぜひ行い、そうでないならやらないということ。」

「何かの決断を下す際におけるアナンタプル校※22の先生と仲間の実例を紹介する。５～６枚の紙に、こうすれば良いのではないかと思われる選択肢を紙に書いて折りたたみ、それをスワミに皆でよく祈ってから紙を一枚引いて開く。そしてそれを実行する。まだスワミが肉体を纏われていた頃の学生の世代では、直接うかがうことができたが、自分たちの世代では肉体のスワミがいらっしゃらなかったので、ハートをとおして伺っていた。そのようにして決断をした友人の例がある。彼女は商学部で勉強していたが、その後の進路を迷っていた。将来の方向性に関して、いくつかの候補があったが結果は会計士への進路に導かれた。会計士の免許を取ることはインドではとても難しいが、彼女は仲間の中で最初にその試験に合格することになった。それは仲間達にとっても、とても大きな出来事だった。」

「まさに昨年は全託が最善の策であると学んだ年だった。私自身は仕事のこともコロナのこともいろいろあった。昨年の卒業にあたり会社に応募した際には、日本国内の会社からは良い反応はなかったが、運よく予想しなかった方から誘っていただいた（＊彼の博士論文の審査委員の先生方の一人が、彼を気に入り、そのチームで研究員になるように熱心に誘ってくれるようになった）。これまで学生の間に行ってきた研究とはまったく違うことに関わることになったので躊躇はあった。新しいことを自分が上手にできるかわからなかった。ただ、どこからともなくこのチャンスがやってきたので、自分はこのチャンスを活かすべきだと思った。何であれスワミが意図してくださるのであれば、私はそれを受け入れようと思った。そのようにして新しい先生の下で研究員として働いている。先生は非常に親切で良い方で、自分をとても成長させてくださる方に出会えていると思う。神の意志を受け入れるということが霊的に成長していくためにも最善のポリシーで、それが全託を形にしていくことだと思う。人間であるゆえに、心の傾向的にも全託が難しいこともあるが、そのような体験を重ねていくと確信が得られるようになっていくのではないか。」

＜ババの御言葉＞

「霊性の領域に近道はありません。実際、バクティ〔信愛〕はグニャーナ〔英知〕よりももっと難しいのです。なぜなら、「私」ではなく「貴方」という態度を身につけるには、神として人格化された高次の力に完全に全託しなければならないからです。エゴ〔自我意識、アハンカーラ〕は完全に砕かれなければなりません。「神に気づかれずして、そして、神がそれを引き起こすことなくして、草の葉一枚、風にそよぐことはない」と

いう信心が、心に植え付けられなければなりません。バクティは暇な時にする仕事ではありません。感覚の欲望を消し去り、ハートの汚れをすべて取り除きなさい。そうすれば、ハートは鏡のように神を映し出すでしょう。」

1965年3月26日
ヴィッドワン マハーサバーの御講話より

※1スワミ：聖者などの尊称、ここではサイ・ババ様のこと。
※2カリユガ：法の力が４分の３失われた闘争の時代
※3シェーシャマ・ラージュ：1911年～1958年。ババの兄でババより15歳年上。
※4ラクシュマナ：ラーマ神の弟
※5ラーマ：トレーターユガにおける神の化身、美徳と正しい行いにおける最高の模範。
※6シーター：トレーターユガの神の化身ラーマ王子の妃、妻としての理想のダルマを世に示した。
※7バガヴァッド ギーター：ギーター：マハーバーラタの戦いの前にマーヤーによって戦う意気を失ったアルジュナにクリシュナが説いた御教え。
※8アルタ：財産、富、金銭、利得、追求、欲求、仕事、目的、原因、動機、意味、利用、事物、事件、場合、訴訟
※9アルタールティ：富を手に入れたいという欲「富(アルタ)あるいは霊力を望み、そのために神を礼拝し、恩恵を求めて祈る人々」
※10ジッグニャース：絶えず強く解脱を求める人、絶対者を捜し求める人。
※11グニャーニ：智者、霊性の賢人、悟りを得た魂、霊的英知を知る者。二元意識(ドヴァンドヴァ　バーヴァ)から逃れた人、自分が宇宙の基盤である真理と一体であると知った人々
※12ラーマーヤナ：ヴィシュヌ神の化身ラーマの物語。インドを代表する大叙事詩の一つ。
※13ハヌマーン：『ラーマーヤナ』に登場する猿。ラーマを深く信愛し献身をささげた。風の神の子で空が飛べたため、飛んで薬草をとりに行ったり、海の上を飛んでランカを偵察に行ったりと、多大な貢献をした。
※14ジャターユ：『ラーマーヤナ』に登場する年老いた禿鷲(はげわし)、ヴィシュヌ神の乗り物である聖鳥ガルダの子といわれる。ラーヴァナがシーターを連れ去ろうとしたとき、衰えた身であるにもかかわらずシーターを守ろうとして戦うが、ラーヴァナに倒された。ラーマはジャターユの頭を膝に載せ、自らの手で死に水を飲ませた。ジャターユはラーマの御名を口にしつつ息を引き取り、ラーマそのなきがら亡骸をとむら弔った。
※15マハーバーラタ：従兄弟の関係にあるパーンダヴァ側とカウラヴァ側の間で行われた十八日間の戦争を背景とした大叙事詩。
※16バガヴァットギーター：インドの大叙事詩『マハーバーラタ』の中の詩。マハーバーラタの戦いの前にマーヤーによって戦う意気を失ったアルジュナにクリシュナが説いた御教え。
※17アルジュナ：『マハーバーラタ』の主人公とも言える英雄。パーンダヴァ兄弟の三男。
※18ヴェーダ：神聖な真理の言葉、神の息吹の集成であり、古代インドの聖賢たちによって視覚化された。もとは一つだったものをヴィヤーサ仙がヤジュル ヴェーダ、リグ ヴェーダ、アタルヴァ ヴェーダ、サーマ ヴェーダの四つに編纂した。
※19ヴァーヒニ（ヴァーヒニ シリーズ）：インド発行の月刊誌、サナータナ　サーラティ誌にテルグ語と英訳で連載されたサティヤ　サイババの著作。
※20アティ・ルッドラ マハーヤグニャ：ルッドラムの詠唱方法には「ルッドラ」、「エーカーダシャ（「11の」という意味）ルッドラ」、「マハー ルッドラ」、そして「アティ ルッドラ」の4つの段階がある。ナマカムを11回とチャマカムを1回唱えると「ルッドラ」になり、「ルッドラ」に11をかけると「エーカーダシャ ルッドラ」になり、「エーカーダシャ ルッドラ」に11をかけると「マハー ルッドラ」となり、「マハー ルッドラ」に11をかけると「アティ ルッドラ」になる。このアティ ルッドラを唱え、催される大規模の供犠のこと。
※21スワミヴィヴェーカーナンダ：インドのヒンドゥー教の出家者、ヨーガ指導者、社会活動家。
※22アナンタプル校：サイ大学の女子大。アナンタプル県の町。アナントプル。

開催日：2021年10月7日(木)
テーマ：「ナヴァラートリーの意義」
参加者：83名

質問：
①ダサラー祭※1のような祝祭を皆で祝う意義とは？
②今回のナヴァラートリー※2をどのような自分自身のテーマ、フォーカスを持って過ごしたいか？
③サイの学生さんからのダサラー祭の体験の共有。

＜参加者のコメント＞

「『自分の中の悪を滅ぼす』ことが身近なお祭りだと思う。自分の中の執着がいっぱいあって、小さなものを手放すことも難しいと自覚している。例えば食事の後にチョコレートを少し食べる習慣のような小さなことでも手放そうと思うと『いやいや、それは楽しみだし』となる。ダサラー祭の機会に小さなことでも少しずつ手放していけたら良いと思う。」

「ダサラー祭の9日間、集中して自分の悪い点を考えたり、女神様の恩寵を考えたり、そして母親のことを考えて過ごすのはとても意義があると思う。」

「今回のナヴァラートリーは、仕事とセヴァ（奉仕）と瞑想の３パターンとなりそう。その時間の合間にサットサング※3の皆さんとバジャン（神への讃歌）を歌うのが楽しみだったり、ヴェーダクラスに出るのが楽しみだったりしている。テーマは、自分の中の欠点を無くすために、引き続き、一なるものを突き詰められるように瞑想を深めたいと思っている。」

「イッチャー　シャクティ（意志の力）にフォーカスしたい。コロナがずっと長く続いていた影響が大きく、皆がピリピリしている。自分の思考が、どんどん汚されて悪い方向に行ってしまうのではないかと感じる。だから、このダサラー祭をきっかけに、毎日このオンラインのプログラムを活用させていただいて、少しずつ自分の思考を綺麗にするように努力して、意志の力（イッチャー　シャクティ）というもの強めていけたらと思っている。」

＜サイの学生のコメント＞

「あらゆるお祭りを祝う意義はとても多くある。一つ目は例えば、何かの出来事に起因している祝祭。ダサラー祭であれば、ラーマ※4がラーヴァナ※5を倒したという出来事に由来する。それは意義の一つの側面だが、出来事に基づいたもの。二つ目の意義は、単に王様が悪魔を倒しただけではなく、善が悪魔を倒したという意味。すべての人々が内なる邪悪な性質を打ち負かさなければならないゆえに、ダサラー祭は何千年も祝われ続けている。ドゥルガー女神※6が鬼のマヒシャースラを倒した。善良さが内なるエゴやプライドを倒すということを象徴している。9日間、そのことをよく考えて瞑想し、内なる敵に打ち勝つ強さを培わなければならない。でも悲しいことに今日の人々は、ただお祭りのランプを灯すだけで自分の内省をしなくなっている。どんな祝祭でもこういう機会に内側を見て悪い性質にフォーカスし、毎年毎年、さら良くなっていくように努力していくこと。また、これは社会的な意味においてもとても大事な祝祭。社会的には家族が皆一緒に過ごしたり、あるいはお爺さんお婆さんの家に行って共に過ごす。この時期に家族の皆さんがより愛によって結びつきを強め、良い時間を過ごすようになる。それがダサラーの祝祭の幾つかの意義。」

「スワミ※7がいろいろな国々で様々な祝祭が祝われる意義を綺麗に説明してくださったことがある。スワミは『祝祭は主に3種類のことに関して祝われる』とおっしゃっている。一つ目はアヴァター（神の化身）が降臨されたことを祝うこと。例えばディーパーヴァリ※8やクリシュナ・ジャンマーシュタミー（クリシュナ神御降誕祭）、ラー

マ・ナヴァミー（ラーマ神御降誕祭）など、実際に化身が降誕され、いろいろな振る舞いをされたことに関係する。二つ目の理由は天文学的（占星学的）な理由によって吉祥であるということ。スワミは『例えばいろいろな惑星が特異的な配置をとった時に、私たちが力強くサーダナ（霊性修行）をするのを助けてくれる』とおっしゃっている。そのような吉祥の日にサーダナをすると何倍もの良い影響があるということ。（＊これと関連して、スタディーサークルに先立ってあるサイの学生が教えてくれたことには、一年の真ん中は夏至であり、一日の真ん中は深夜であるとのこと。すると、秋のナヴァラートリーの時期は一日に例えるとブラフマ ムフールタ※９の時間帯に相当しており、集中的な霊性修行に適しているというサナータナダルマ（古来永遠の法）的な見解がもたれているとのこと）。三つ目のポイントはそれらのアヴァターが行ったいろいろな行いについて祝い、黙想すること。これまでのアヴァターたちのいろいろな行いでは、どれも善が悪を倒してきた。スワミはこのようなアヴァターの善い行いを私たち自身の生活に取り入れるようにとおっしゃっている。ダサラー祭を祝うことが社会に良い波動をもたらす。スワミはいつもこのような機会に帰依者にグループ・バジャンやヴェーダの吟唱などのグループ活動を促される。そして各地で帰依者が集って祝祭を祝うと、様々な異なる場所に優れた良い波動が広がる。そしてBro. Bのスピーチで教えてくれたように、ダサラー祭にはイッチャーシャクティの重要性がある。いろいろなアヴァターにまつわる祝祭を祝うことによって、良い行いだけを行う意思の力がもたらされる。このような特別な日に、人々は正しい道を歩むために一人ひとりが誓いを立てる。それが一人ひとりのサーダナを助けていくことになる。」

「ナヴァラートリーは９つの夜という意味で、夜が９回で１０日間だが、先ほどの説明のように一日一日違う姿の女神を讃えることになる。その間、女神様とアヴァターに九種類の迷妄を除いて下さいと祈る。そして私たちの人生に肯定的なものを導き入れることを目的にしている。そして一度そういう肯定的なものを呼び込むことが出来れば、愛や幸せを周囲にももたらすことが出来る。また、このお祭りはラーマがラーヴァナを倒した祝祭でもある。ダス(Das)は数字の１０という意味で、サラ（sara）は取り去るという意味。ラーヴァナには１０の頭があったといわれるので、それらを取り去るという意味が、ダサラー(Dasara)の言葉の意味。今、カリユガ（法の力が４分の３失われた闘争の時代）において、ラーヴァナの１０の頭というのは１０通りの異なる迷妄を意味している。ラーマはラーヴァナからシーター※１０を取り返したが、今の時代では、シーターというのは私たちの内なる意識に対応している。シーターは私たちの内なる意識で、ラーマとラーヴァナの戦いが私たちの内側にある。私たちは内側のラーマがシーターを取り戻せるようにしなければならない。従って、この時期は特に内なる善良さによりフォーカスする時期であると考える。」

「悪い事を除くという意味に加えて、この祝祭には私たちに識別力を与えてくれるという側面がある。この時期には、皆さんでセヴァをしたり、ヴェーダを唱えたり、バジャンを歌ったりひたすら霊性修行をして過ごす。そして、この時期に私たちの時間やエネルギーを良い事に使えば、心がフォーカスを得る。そして、もう一つ大事な事は、この九日間、いろいろな霊性修行に従事して、それをきっかけとして長い間続けて行くことが大事。自分はこの時期に自分の心のフォーカスを定めたいと思っている。霊的な事でも、職業的な事でも、両方においてそうしたいと思っている。そして、この九日間、（金沢のサイの学生たち）皆でヴェーダを九日間、必ず唱えたいと思っている。もし、この九日間のフォーカスをもっと長い間続けていくことが出来れば非常に良いだろうと思う。」

「今年の自分のフォーカスは、心の静寂。例えば、口が静かにしている時でも、心の中では沢山

のおしゃべりが行われていると感じる。その事がいろいろなことの効率をとても下げていると思う。そして私たちの内なる思いは、他者に対する見え方にも反映して関係していると思う。この内なるおしゃべりを止めることによって、人々との関係も良くしたい。ダサラーの時の短いエピソードを一つ共有すると、村の外れに住んでいた一人の女性がいた。お子さんたちも、そのお年寄りの女性の面倒をちゃんとみておらず、一人で住んでいらっしゃった。そのような時期に、グラーマ セヴァ（村への奉仕）の時にブラザーたちが彼女の家に行った。その女性はスワミのことが大好きで何時もすごく祈っていた。でも多くの理由から、彼女はプッタパルティ※１１にはなかなか行けなかった。それで学生たちがグラーマ セヴァで来てくれると、その女性が大変喜んで、自分がスワミの所に居ることが出来なくても、こうしてスワミが自分の所に来てくれるのだと言って喜んだということ。そのようなやり方で、バガヴァン※１２は、一人ひとりのもとに来てくださる神様なりの方法をもっていらっしゃるから、この時期には神様が私たちに教えてくださるいろいろなことを受け取れるようにオープンな心でいよう。」

「このお祭りは良いものが悪いものを倒したという意義を教えてくれている。しかし、昔は大事にされていたいろいろな儀式の本当の意味が薄れてしまっており、祝祭は家族と肯定的な雰囲気や良い感覚を共有する時間になっていると思う。他者の悪いところを矯正しようとして指摘するのではなく、良いところを広めていくことが大事な時期だと思う。自分の体験で言うと、学生時代にダサラー祭の時期にグラーマ セヴァに行った。スワミが与えてくださるので、自分が与えているのではなく、自分は道具に過ぎないということを教えてくれた。グラーマ セヴァをすると、何か良い功徳が積めるなどと言う人は誰もいなかった。ただ私たちの神への愛によってその仕事をしていた。一人ひとりがいろいろな活動に携わって、夜通しで料理をする人もいた。プログラムをコーディネートする方もいれば、プラサーダム※１３をすべての方に配るというセヴァをしている方もいた。そこですべての人に共通しているものは神への愛だったと思う。すべての人が神への愛のためにスワミのために行うのだという共通した思いをもっていた。自分にとってこの体験が教えてくれたことは、一人ひとりの違いやユニークさを神への愛のためにすべて乗り越えることができたということ。より良い人間になるため、よい行いを重ねていこうというレッスンの時期だった。もう一つは、生きとし生けるものだけでなく、すべてのものを尊重するということ。例えば、自分の家庭では両親が仕事のオフィスにあるものや楽器などに対してもプージャー※１４を行っていた。今はそういったものをすべて同じように敬うようになっている。それは単なる尊重だけでなく、感謝のため、あるいは車を止めて安全のためにも祀る。そういったことがダサラー祭を祝う上で私が体験してきたこと。」

「（プッタ）パルティでもブリンダーヴァン※１５でも自分にとってダサラー祭は、特別なイベントだった。日本に来てからも、ダサラー祭の時期にグラーマ セヴァに参加するためにインドに帰ったこともある。スワミが御言葉で自分が一番引き付けられたものの一つが、“Help Ever Hurt Never(常に助け、決して傷つけない)”だった。この御言葉が、大学に入った時に初めて目に入ってきた御言葉だった。その御言葉のおかげでグラーマ セヴァから受けるインスピレーションがとても大きくなった。私たちだけではなくて、プッタパルティやアナンタプル※１６にいるすべての人がこのグラーマ セヴァがとても好き。アナンタプルの女子学生たちは男子学生が配る食事を夜通し作り、パッキングしてくれる。また、小中高の若い学生たちも、食べ物ではないがサリー※１７などをパックして配るためにセヴァをしてくれる。本当に一つひとつの仕事にスワミが与えてくださるエネルギーがある。近隣の人々やその環境に住まれている方、何も持っていらっしゃらない方々、そういう方々にも愛を示す時。スワミがおっしゃるのは

あなたが奉仕をしているのではなくて、奉仕はあなた方を様々な形で律してくれているということ。私たちは人を、持っている富ではなく、その人の人間性に基づいて尊敬するべきであるということ。グラーマ セヴァに行くと、皆さんはセヴァをしている学生たちをあたかもスワミのように扱ってくださる。グラーマ セヴァ以外にも多くのイベントもある。私にとってダサラー祭というのは、それを通して自分がとてもスワミに近しくなることができた行事だったと思う。それは奉仕、グラーマセヴァを通してのみ可能だった。」

＜ババの御言葉＞

「ナヴァラートリーは三つの期間に分けられます。最初の三日間はドゥルガー女神への礼拝に捧げられます。次の三日間はラクシュミー女神への礼拝、最後の三日間はサラスワティー女神への礼拝に捧げられます。ヒンドゥー教の祝祭にはすべて、神聖な目的があります。不幸なことに、近年の祝祭では、内的な意味は理解されずに、外的な儀式だけが行われています。どんな形態の礼拝においても、心と体が定まっているべきです。そうして初めて、集中することができるのです。」

１９９２年9月２７日

※１ダサラー祭：ドゥルガー、ラクシュミー、サラスワティーに象徴される三つのグナを打ち破り、無知からの解放を願うヒンドゥー教の祭礼。ナヴァ ラートリー（九夜）ともいう。アーシュヴィン月の新月に始まる。通常三日ずつ各女神を礼拝する。プッタパルティではヴィジャヤ・ダシャミーまでの1週間ヴェーダ・プルシャ・サプターハ・グニャーナ・ヤグニャ（第１回1961年開催）が行われる。また、この期間、プラシャーンティ・ヴィドワン・マハー・サバが開かれて学者がスピーチを行い、学生と学校のスタッフを中心にグラマ・セヴァが行われる。ダシャラー、ダシャラ、ダセラーほか、さまざまな言語の呼び名がある。
※２ナヴァラートリー：九夜。上記参照。
※３サットサング：善人との親交、神との親交、善い仲間と共に過ごすこと、善い仲間に加わること。
※４ラーマ：トレーターユガにおける神の化身、美徳と正しい行いにおける最高の模範。
※５ラーヴァナ：『ラーマーヤナ』に出てくるランカーの羅刹（悪鬼）の王。
※６ドゥルガー（女神）：近付き難い女神の意、パールヴァティー女神の別名。
※７スワミ：聖者などの尊称、ここではサイ・ババ様のこと。
※８ディーパーヴァリ：ラクシュミー女神を祀りランプが灯される。ディーワリとも呼ぶ。ヒンドゥー教三大祭の一つ。商人階級や庶民のお正月。ヒンドゥー教徒にとって新年とも言える大祭で、毎年10月下旬から11月上旬ごろのカールティカ月（ヒンドゥーの暦の7番目の月）の新月の夜に行われます。別名を「光の祭り」とも呼ばれる。
※９ブラフマ ムフールタ：ブラフマンの刻。日の出から翌日の日の出までを30等分した29番目の刻。だいたい午前3時から6時あるいは5時の間。
※１０シーター：トレーターユガの神の化身ラーマ王子の妃、妻としての理想のダルマを世に示した。

※１１プッタパルティ：スワミの生誕地であり本拠地である町の名前。
※１２バガヴァン：神や半神の呼称、尊者、尊神、至高神絶対者。ここではサイ・ババ様のこと。
※１３プラサーダム：神がなだめられたときに流れ出る恩寵。帰依者が捧げた供物を神が祝福して帰依者に恩寵として与える場合が多い。プラサード。
※１４プージャー：礼拝、礼拝供養、供物を直接神の像に捧げて礼拝する儀式、花や果物その他の食べ物を捧げて神像や肖像画の神を招き寄せ、特定のマントラを唱え特定の身振りをしながら神をこの上ない客人としてもてなし神の機嫌をとる、儀式礼拝、詩を吟唱したり歌を歌いながら一定の時間に行うあらたまった礼拝、供養、崇拝、尊敬、奉献（尊敬をもってもてなすことが原意）、何らかのものを供えて神々に礼拝すること。プージャーは家長の大切な務めとされる。
※１５ブリンダーヴァン：ババの別荘と大学があるホワイトフィールドの別称。
※１６アナンタプル：サイ大学の女子大のあるアナンタプル県の町。アナントプル。
※１７サリー：インドの女性が着用する民族衣装。約５ｍの１枚布で、体に巻きつけて着用する。

開催日：2021年10月10日(日)
テーマ：「ダシャラー祭※1で行われる様々な儀式の意義」について
参加者：72名

質問：
①日常においてどのように犠牲の意識を深めることができるか？
②儀式の意義を理解することが役立っている体験は？
③儀式という霊性の方法論をどのように上手に活用したいか？

＜参加者のコメント＞

「雨乞いの儀式に傘を持ってきたのは子供だけだった。という話を聞いたことがある。子供は雨乞いの儀式により雨が降ると信じているから、傘を持ってきた。でも大人は儀式をやりながら誰も傘を持ってこなかった。儀式を行うときにどれだけ信じて行うのかが一番と思った。」

「供犠の火にくべられることで神様のためになると理解した。社会生活でも、些細なことも自分の立場だけでなく、組織が上手く運営できるように誰もやらいことをするとか、自分の好きなことだけをやるのではなく、すべきことを優先する。小さな積み重ねが大事だと思う。」

「『女性たちは家庭のグリハラクシュミー※2です。』とスワミ※3がおっしゃっていたと思う。母親や祖母とか、これまでお世話になった年長の女性たちが美しいのは、喜びをもって家族や周りの人たちの皆を愛することだけに一生懸命生きたからであると思う。母親を幸せにするとか、母親への感謝とか尊敬の念が無い限り、いくらそういうヤグニャとか、そういうお祭りをお祝いしても意味がない。やはり母親を尊敬できて、年長の女性たちを尊敬できて、その女性たちから良い所を学んでいて、実践の先に女性の美しい生き方があると思っている。２０年ぐらい前に東京センターでセヴァ(奉仕)をしていたとき、毎日、儀式のようにヤグニャの火は使わなかったが、本当に熱心にアクティブワーカーたちが集まってセヴァを捧げた。さらにスワミの御降誕祭にかけては、皆が大忙しだった。そうしたことで、精神的な強さというものを与えられた気がする。」

「以前、祭壇のセヴァをしていた。作法があって細かく決まっていた。例えば掃除を一つすることでも、常に儀式という感じで丁寧に行う。順番も決まっていてそれに添って行っていく。それらを学んで行うことにより、神様を敬うこと、信仰心などが培われてきた。もし何も決まってなくて、自由に掃除したり、自由に何か飾ったりしていたら、エゴが膨らみ、信仰心は培われず、ただ綺麗にするという行為となっていたと思う。」

「日常は世俗の二元性、マーヤー(まぼろし)の中にどっぷり浸っている。だからラーマ※4、クリシュナ※5、シヴァ※6などのお祭りによって、それらの準備をしたり御言葉を読んだりして、自分は何のために生まれてきたのかという命題を思い出すきっかけになっていると思う。質問②について、定例バジャン会（神への讃歌）※7でヴィブーティ(神聖灰)※8が最後に配られる。あのヴィブーティをいつも自分は漫然と今日はどんな味かなとか思いながら飲んでいた。あるときどなたかがおっしゃったが、これは自分の何十年後かの姿なのだろうと思い、まさに諸行無常というか、小さいことにとらわれても仕方がないと改めて思うきっかけになった。意義を理解するのがとても大事だと思った。」

「なぜか昔から神様のお祭りや儀式などに惹かれてきた。偶然か必然か現在、お祭り担当(セヴァ)をしている。以前ババが聖水を撒いているビデオをお祭りで使ったとき、ものすごく浄化されて祝福されたような感覚が皆にあった。お祭りという、神々に捧げる儀式は、ものすごく事細かくあると思うが、私も学びながら少しでも日常に根差して行っていけるようにしたい。センター活動のお祭りのときに、毎年続けて、意義を伝えたり

学んだりして少しずつでも深まっていけば良いと思っている。」

＜サイの学生のコメント＞

「行動だけではなく思いも捧げなければならず、それが犠牲。思いの場合にはコントロールできないことがあり、良くない思いや純粋でない思いでも、湧いてきたらそのまま神に捧げることがある。思いは行動に変化しないうちにどんなものであれ神に捧げられると思う。思いの段階では人々にそれほど悪い影響をまだ与えないから。でも行動になってしまうと一つひとつの行動が周りに影響を与えてしまう。従って、どういった行動を捧げられるかチェックリストを作り、実践しなければいけないと思う。霊的な成長には時間がかかるが、いつかはゴールにたどり着くと思う。ゴールにたどり着いたときにカルマ（行為の結果）が自然になくなると思う。自分の言葉や行動をチェックすることによる進歩が犠牲だと思う。神に捧げ進歩することが犠牲。これが自分の中の理解になっている。」

「ヤグニャの炎は、人が捧げる供物の目撃者。捧げものの代わりに様々な繁栄を与えてくれる。日常生活においても私たちは神に捧げ、祝福を祈る必要がある。私たち自身が犠牲を捧げるために、どれぐらいの努力をしているかを自分自身は知っている。スワミによれば自己犠牲はエゴや感覚を犠牲にすることを意味している。もちろんエゴが人生の大きな一部分になっており、エゴを捧げるのがとても大事なことで、神に捧げる準備をしていなければいけないと思う。自己犠牲が愛のエッセンス。同時に動物的な性質、怒りや貪欲などの6つの敵を犠牲として捧げる。それらは有害で私たちが神に到達するのを阻害するため、日常生活において可能な限り犠牲にして、代わりに愛などを培っていきたい。犠牲を捧げた結果、平安を授けていただけると思う。」

「サイの大学のある先輩のエピソードをご紹介したい。マハーシヴァラートリ※9のときにルッドラム（シヴァ神を讃えるマントラ〔真言〕）※１０を完全な集中力で11回唱えればシヴァ神が姿を表すという文献の記述があった。それには唱えているときの完全な献身が必要。その先輩の学生は、どうしてもシヴァ神のダルシャン（聖者や神を拝見すること）を得たいと思ったので、そのような完全な集中で、ルッドラムを11回唱えた。そして11回ルッドラムを唱えて、それからほぼ眠りについてしまった。実際にその11回ルッドラムを唱えた後でスワミがシヴァ神としてのダルシャンを与えに来てくださったとのこと（トライー・ブリンダーヴァン※１１にスワミが戻って来てくださった通常のダルシャン中、その学生の目にはシヴァ神の姿でのダルシャンが見えていたとのこと）。このようなエピソードは、儀式の意味を理解するとこのような体験につながるということを教えてくれた。」

「儀式はそれぞれにすべて深い意味がある。儀式によって純化するというのは肉体的、精神的にも両方の面がある。そして儀式は私たちの習慣を生みだす。従ってそれが私たちの霊的な方向性を生み出すことになる。誰でもガネーシャ※１２を崇める人は皆、良い知識や英知を授かる。多くの帰依者の皆さんがフードマントラ（食前に唱えるマントラ）を唱えているように、私たちはいろいろな儀式に伴って唱えられる、さまざまなマントラを知っている。以前に読んだ日本人の科学者の本で、その内容は、氷の結晶の構造が、それを見ている人の感情がどのようなものかによって形が変っていく、というものであった。その事を知ってとても驚いて、きっとマントラというものも、そういったものの多くを含んでいるのだろうと思うに至った。幾つかの言葉だけで、その氷の結晶の構造が変ってしまうのであれば、一体、マントラというものが、私たちにどれ程多くのことをもたらすのだろうと思った。カリユガ※１３においては、儀式というものは、より簡素化すべきであるとスワミはおっしゃっている。国によってそれぞ

れ様々な儀式があると思うが、完全な信仰が伴うことで効果が得られると思う。そこでは信仰というものが鍵となり、大きな役割を果たすのだと思う。ナヴァ ラートリー（※1ダシャラー祭と同じ意味）の間に行っている特別なサーダナ（霊性修行）が、より良い信仰をもたらしてくださるようにスワミに祈って参りたいと思う。」

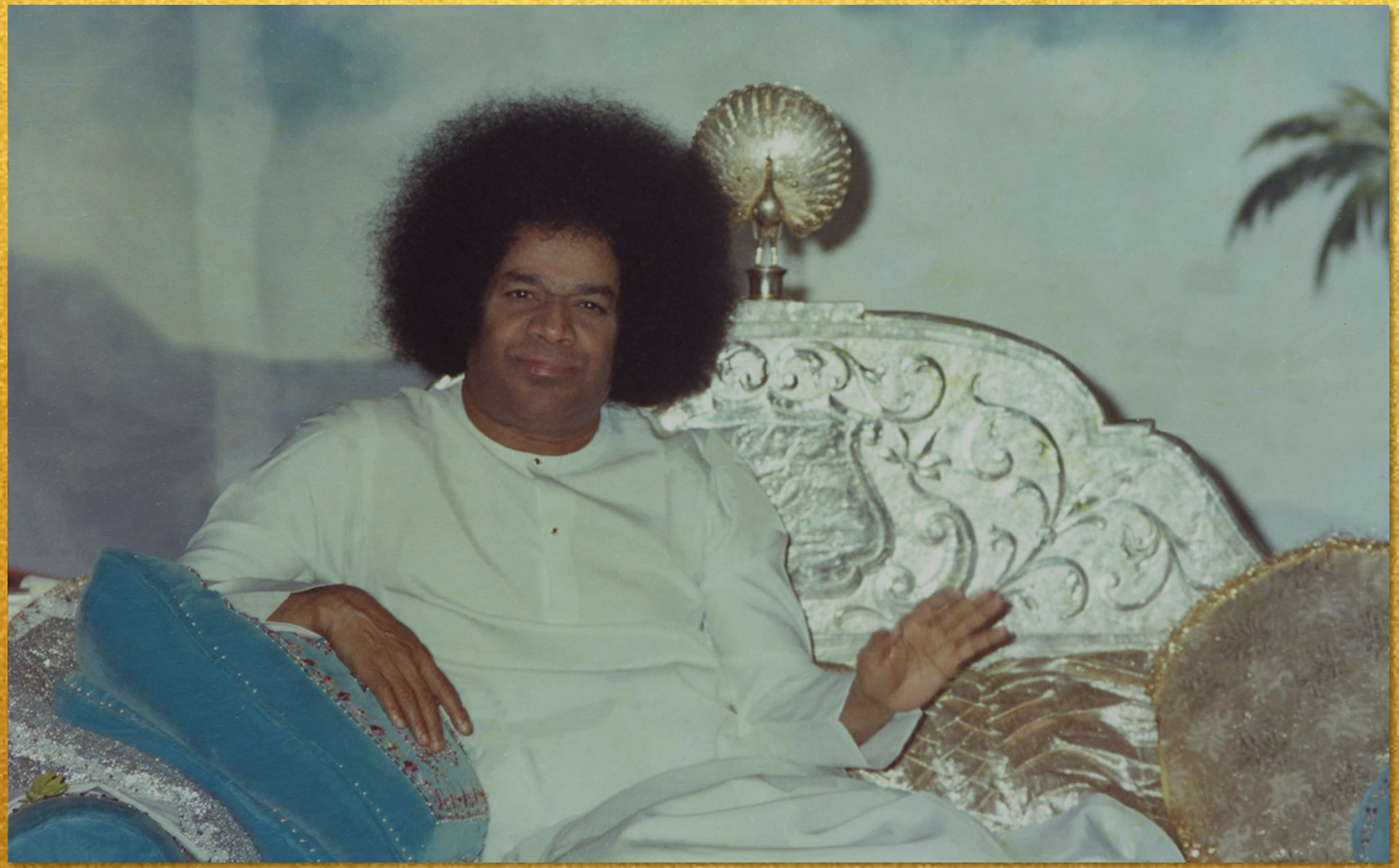
「儀式の背後にある精神を理解することによって、その効率性が高まるのではないかと思う。儀式(ritual)の背後にある精神(spirit)を理解することがスピリチュアリテ(spirituality)だとスワミがおっしゃっている。完全な意識をもってそれを行うことだと思う。」

＜ババ様の御言葉＞

人間の行いは、その人を高めるか、転落を引き起こすかします。ダルマの原則と一致する行いはすべて、ヤグニャ（供犠）という名の尊厳に値します。ヤグニャには、聖典の中で言及されている2つのタイプがあります。それは、外的なヤグニャと内的なヤグニャです。外的なヤグニャの形態はそれほど重要ではありませんし、生産的でもありません。それは、ただ捨てられるため、片付けられるために言及されるのみです。というのも、中の実がなければ殻は何の役に立ちますか？ 神の御名と栄光を瞑想しながら神を礼拝することも、内的なヤグニャの一つの形態です。

１９７７年１０月１５日
ダシャラー祭の御講話より

※１ダシャラー祭：ドゥルガー、ラクシュミー、サラスワティーに象徴される三つのグナを打ち破り、無知からの解放を願うインドゥー教の祭礼。ナヴァ ラートリー（九夜）ともいう。アーシュヴィン月の新月に始まる。通常三日ずつ各女神を礼拝する。プッタパルティではヴィジャヤ・ダシャミーまでの1週間ヴェーダ・プルシャ・サプターハ・グニャーナ・ヤグニャ（第１回1961年開催）が行われる。また、この期間、プラシャーンティ・ヴィドワン・マハー・サバが開かれて学者がスピーチを行い、学生と学校のスタッフを中心にグラマ・セヴァが行われる。ダサラー、ダシャラ、ダセラーほか、さまざまな言語の呼び名がある。
※2グリハラクシュミー：家族の富と平和と繁栄の化身そのもの、家のラクシュミー。グルハラクシュミー。
※３スワミ：聖者などの尊称、ここではサイ・ババ様のこと。
※４ラーマ：トレーターユガにおける神の化身、美徳と正しい行いにおける最高の模範。
※５クリシュナ（神）：ヴィシュヌ神の化身、ドワーパラユガにおける神の化身　純粋な愛の具現。
※６シヴァ神：破壊を司る神
※７バジャン：神への讃歌。ヒンドゥー教の聖歌、礼拝、神の栄光を歌うこと。
※８ヴィブーティ：１）力の表れ、偉大な力、栄光２）聖灰。サイババが物質化する芳しい味と香りのする灰。万物は最後には朽ち果て灰に戻るという事実の象徴。サイ ババが物質化する芳しい味と香りのする灰には、与えられた者への特別な恵みが含まれているため、口に含んだり身体の悪いところなどに付ける。シヴァ神の象徴でもある。
※９マハーシヴァラートリ：一年で月が一番細くなるパールグナ月黒分（満月の翌日から始まる新しい一ヶ月の前半）十四日の夜に行われる大シヴァ神祭。
※１０ルッドラム ：すべてのヴェーダの真髄といわれ、至高の神（シヴァ神）の一切普遍相を描写した非常に神聖なマントラ。ルッドラムはクリシュナ ヤジュルヴェーダに収録されており、ナマカムとチャマカムという2つのパートからなる。
※１１トライー・ブリンダーヴァン：ブリンダーヴァンのスワミのお住まい。蓮の花の形をしている。1984.4.26完成
※１２ガネーシャ：ガナ（神群）のイーシャ（主）の意。ヒンドゥー教のシヴァ神の長男である象頭神。日本名は聖天あるいは歓喜天。
※１３カリユガ：法の力が４分の３失われた闘争の時代。



Jai Sai Ram